
オンラインRPG【獣化伝】

ノラ犬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オンラインRPG【獣化伝】

【ΖΖコード】

ΖΖΟΙΟΙ

【作者名】

ノラ犬

【あらすじ】

「なあ、虎獅　トライ　、オンラインゲームの【獣化伝】って知つてつか？」

「はあ？なんだよ、それ！超気になる！」

「だろ？この間正式サービスが始まったゲームなんだけどさ……」

内容はプレイヤーが狼、虎、獅子、熊、竜【未実装】の種族の獣人の中から種を選んでゲームを進める、と言うゲームだった。

MMORPGとは、マッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン・
ロール・プレイング・ゲームの略称。日本語では、「多人数同時参
加型オンラインRPG」

ゲームを始める前は、こんな事になるなんて思つてもいなかつた。

参加人数、35万人

変わり行く身体、俺達に拒否権は……無い。

このものがたりはふいくしょんです。

全てのケモナーの方の夢と希望を乗せて、お届け致します。

プロローグ ネトゲ中毒者の憂鬱（前書き）

この物語は完全なるフイクショーンでござります。
よく言われるのですが、獣化伝なるM M O R P Gは存在いたしません。

プロローグ ネトゲ中毒者の憂鬱

「学校……だるつー！」

「高卒」

その表面上だけを得る為だけに通う高校。
実際はただみんなで授業を聞き流しているのが現状である。

俺の通う星稜【せいりょう】高校は、県内でダントツの馬鹿高。
母さんには申し訳ないが、楽な道を選ぶためにレベルを5つ落とした。

「めんね、母ちゃん。」

将来の好物は親の脛【すね】になりそつだが、頑張つて社会に出るよ。

初夏の空の下、チャリを漕ぐ脚は緩慢と。
遅刻常習犯は俺だけじゃない、他にも……。

「お、奇遇だなあ虎獅い。学校まで一緒に行こうよ」

そつ、こいつも遅刻常習犯だ。

現在時刻、8時38分。HRは40分からだから、確実に遅刻である。

「こいつは俺の悪友……ではないが、友達。
名前は星野遙靈【ほしのほるか】だ。

因みに俺は中村虎獅【なかむらとら】

俺も遙靈も、今年で高2になつた。

「虎獅っ、やうこやせ、俺お前に良い情報があるんだ。教室で授業
中に話さつよ

いや前言撤回だ。こいつは俺の悪友だな。

授業中に話される教師共の気持ちにもなつて見る。と言いたい。

「マジで？ 楽しみ～」

が、俺にその様な事を言つ資格は……、

無いと言つた方が正しいだろ。

腕時計を確認する。もう45分。

HRはとっくに始まっているのだが、俺達はやっと学校に到着した。

「もう遅刻だしな。歩いて行こつか

俺は悪友遙霞のその言葉に頷く。

何故なら、僕は楽な道が大好きですから。

「またお前らは。一々遅刻処分書を書く俺の身にもなってくれ」

「「すんませーん」」

この高校では、遅刻をすると職員室へ行つて先公にその旨を告げて書類を書いて貰わなきやならない。

俺と遙霞は、そのために担任の先公である坂田の元へと来たわけだ。

「……つと。じゃ、次も気をつけよう

「はーい」

書類を書き終えた坂田は、俺達に遅刻処分書の証明書を渡し、どこへと消えた。

失礼しました、と職員室を後にした俺達は、自分達の教室へと向かう。

……遙霞は何の情報を俺に言つつもりなんだろ？

だが、楽しみは取つて置いた方が良い。

今は待つべきだ。

騒音を発してつつ、教室のドアを開ける。一斉に振り返るルームメイト達には一瞥もくれず、自分の席へ向かつた。

……俺は教卓の真ん前の席だけど。

「お、虎獅！ ハル！ またお前ら遅刻か？」

こいつも俺の友達。

ガタイの良い、長谷奏江【はせかなえ】

「そうだよ、奏江。な？虎獅」

「おひ。今日もまた遅刻さ」

数学の授業中、教師も既にいると言つのに俺達は笑いあつた。

毎日の事だ。数学教師の加藤は、そんな俺達を見ても少々呆れた顔をするだけ。

酷く怒る事は全くと言つて言い程無い。

怒る時は、軽く笑いながら。近年まれに見る優しい教師だ。

「一いつ。中村、星野、長谷も。今は授業中だぞ」

その言葉に、俺達はまたしても笑う。

加藤の注意はまつたりしすぎなんだ。

ふと右に視線を移すと、佐野藍琉【そのあいの】が。視線があつた途端、笑顔で手を振つて来る。

藍琉も俺達の仲間だ。

……ただ、ちよいとばかり真面目君なだけで、基本俺達と一緒にすげしている。

左を見れば遥霞が、後ろを見れば奏江がそれぞれニヤリと笑つていた。

視力が悪いから、と志願すれば、前列あたりの好きな場所を選べる事を良い事に、俺達は毎度固まって席を選んでいる。

席なんて前列だろうが後列だろうが寝てたらどうせバレるんだ。なら、みんなで固まって席を寄せた方が、何倍も楽しい。

「I/Iの問題の答え書いてくれる人〜」

加藤が黒板に次々と訳の分からん式を白いチョークで書いて行く。

「いないなら番号順な〜。……神谷（1）。川田（2）。君島（3）。桐生（4）だ。」

俺達4人組は誰一人として当てられなかつた。

加藤は気まぐれだから、いつ当たられるかがイマイチ分からない。

そして、俺は授業そっちのけで後ろの秦江を見る。すかさず遙霞が割り込み、藍琉は時折顔を出す。

「……で、遙霞。朝言つてた情報つて？」

「ん?なんだ遙霞。俺にも教えろ〜」

藍琉は授業に集中しているフリをして、一いちじに聞き耳を立てている。

加藤は俺達の相手をするより質問していく生徒に付きつかつだ。

「おっけー。昨日面白やつなゲームを探してたんだけビタ……」

ゲーム。

俺達は全員ネトゲ中毒者。

昼休み、俺が冗談でとあるネトゲについて独り言を叫んだら、遙靈と秦江に男子便所へと連行された。

その時までは、お互い対して意識をする価値も無い様な当たり障りの全く無い仲。

後から藍琉も着いて来ていた様で。

何かと思えば、自分達もそのゲームをやっているとの事。だから、仲良くしてくれないかと。

この事がきっかけで、俺達は幼馴染みの様にそれぞれ仲が良くなつたんだ。

起動

「……そのサイトで気になるバナーがあつてさ。なあ、虎獅、オンラインゲームの【獣化】って知つてつか?」

一やついた顔で振られた話題に、思わず食い付く。

「はあ?なんだよ、それ!超気になる!」

「だろ?」この間正式サービスが始まつたゲームなんだけど……めつちや楽しいんだよ、これが!」

授業も終盤。

俺達は声を上げて会話を楽しんだ。

「今流行の3Dじゃなくて2Dなんだけど、キャラがカッコ可愛いくつもある!」

遥霞は言わばグループのムードメーカー的存在で、話を聞いていると引き込まれる。

「マジかよ~。なんでメールで知らせてくれなかつたんだ!」

奏江が遙霞を小突く。

このやり取りも、最早見慣れた風景だ。

「だつて夜中の3時だつたんだよ!?」

「まだ起きてるつづーの!」

全すべてにしつらは……。一体いつ寝てこのかすら分かつたもんじゅ

ない。

「じゃあ帰つたらやるつぜー」

昨夜の睡眠時間は5時間を割っているであろう秦江が、俺達に声を掛ける。

「おうよ。遙霞、お前サーバーと名前」

オンラインゲームにおいて、リアル友達（通称リア友）と一緒に遊ぶために必要なのは、

その友達のキャラクター名

サーバーの名前

キャラクター名ほどのキャラだか見分ける為に、
サーバーは世界の様なものだから、世界が違うと同じ場所には居られない。

必ず同じサーバーじゃないと駄目なんだ。

2時間目から俺達は帰宅したいモード全開。

勿論件のネトゲ、【獣化伝】を早くプレイしたいからだ。

遙霞は、自分のキャラの名前を「F A R」、遠いって意味で「遙」から取つていると囁いていた。

そう言えばいつもF A Rだな、と今更気がついた俺は鈍いのか。
んで、サーバーはW O L FとT I G E Rがある内の、W O L F。

おまけにキャラの種族は狼に、職業は聖職者にしたよつだ。

ネトゲの中で言つ聖職者は、主に回復担当で魔法系。ゲームによつてだが、回復魔法と補助系魔法を使いこなし、スキルが他職よりも多い、つて傾向がある。

まあ、パーティーでダンジョンに行くなら欠かせない存在だ。

更に聞くと、職業は今は4つあり、戦士、聖職者、盗賊、魔術師だとか。

今の内からそれぞれ決めておこうって事になり、

遙霞はさつきの通り狼の聖職者、

奏江は熊の盗賊、

藍琉は獅子の魔術師、

そして俺は勿論、虎の戦士にする予定だ。

「こまできちんと決めていると、余計ゲームをやりたくないって来てしまう。

下らなくて詰まらない学校の授業が終わつて早速、俺達帰宅部は帰り支度をする。

「じゃ、みんなゲームでね」

遙霞のこの一言にそれぞれが反応し、俺は帰路へ着いた。
いやあ、ケモナーな俺にぴったりのゲームじゃないか。

今後未実装とされる竜が実装されれば、ドララーな方だつて大喜びだ。

「ただいま～」

道中のチャリでは呆けていて5回くらに田んぼに落ちそうになつた。
田舎過ぎるだろ……。

「おかえり～虎獅～」

おっとのこの声は。俺と同じくネトゲ廃人のお母様じゃないか。
やっぱ親子は似るものだ。

「母さん、俺今から新しいネットゲyarから邪魔しないでね」
「はいはい、ご飯今日はおうどんだから！」

階段を駆け上がる俺の後ろ姿を、母さんの声が追つ。

「さて、ゲームつと……」

俺はゲームPCの電源を入れた。ゲームマニアとは言つても、ウェブ
が見れない訳じゃない。

ただPC自体の性能……そうだな、メモリとかが良いだけだ。
PCは少し待つと直ぐに起動し、俺はYAHOO!を開いて「獣化
伝」と検索した。

「……お、これか」

検索で一番上に表示されたサイトをクリックする。

ジャンプすると、そこには様々な種類の獣人の綺麗なイラストが背

景に描かれていた。

これは……けしから……いや、もつとやれ。こりゃケモナー魂をくすぐるぜ。

と言ひ事で。

俺は早速このゲームの会員登録を済ませ、ゲームをダウンロードした。

流石ゲームPC+フツツ光。

ダウンロードもインストールも直ぐに終わる。

「よし、これで早速獣人を捕めるのかー！」

興奮冷めやらぬ俺は、独り言が多くなった気がする。
そんなこんなで、俺はようやくゲームを起動した。

「」の名前は使用できます

おっ！これは嬉しいな。

ただでさえ虎族があるので、TIGERは使用できないと思つていたからだ。

んで、お次はサーバーを選択してくださいか。

WOLF【狼】

TIGER【虎】

サーバーはWOLFと。

これでやっとキャラクターを作れるのかな。

パツと表示された画面の中心には、可愛らしい灰色の狼獣人が立っていた。

「うおおおお！…獸！」

かく言う俺はこれではケダモノ。様々な獣ジャンルの中で、獣人が一番好きだ。

俺は迷わず種族を虎族にした。毛色はどうじょうか。

因みに、画面はこうだ。

ノーマル【黄】
ブラック【黒】
ホワイト【白】

……これは意外にも迷うぞ。

試しに黒を選択すると、画面中央の虎獣人の毛色が、黒地に白縞に変わった。

ぶほつ……かつこええ……。

落ち着け、俺。これではただの変態だ。

白も一応見てみたが、やっぱり一番は黒が良い。

「よし、黒に決定！」

NAME : TIGER

SERVER : WOLF

RACE : TIGER

COLOR : BLACK

OK?

YES
NO

YESっと。

さて、次は何かな？

次に表示されたのは、キャラクターの表情やら何やらを変更する画面だった。

凄いな。こんな所にまで凝つてんのかよ。

2Dでカッコ可愛く表示されるのなら、俺は責めてカッコいい感じにしたい。

俺は凛々しい顔を選び、目の色を黄色にした。

次の項目では、毛の癖まで変えられる事にかなり驚いたが。

「じゃあ、ちょいと毛足を長くするかな」

自分の作ったキャラを見れば見る程、俺はキャラが好きになつた。

【ENTER】をクリックすると、先程と同じような確認画面が表示される。

FACE..COOL

EYES..YELLOW

FUR..HITTE LONG

OK?

YES

NO

YES……つと。

これまで確認画面だと英語だったのが、キャラクターを作成した途端、日本語になった。

【キャラクターを作成しました。これから獣化伝説をお楽しみ下さい】

第一章 LOG IN(前書き)

見渡せば、そこは獣の世界

第一章 LOG IN

あの文字が消えて画面が暗くなつたと思つたら、今度はフワッと光つて画面が明るくなる。

画面中央には、俺のキャラらしき3頭身の虎獣人が尻尾を振つていた。

どうやら拠点となる街のようだ。

獣王街【じゅうおうがい】？

目の前にあからさまに初心者は話しかけてね！な感じの狼獣人のNPCが立っている。

……て言つかこいつしか居ない。

仕方無く、そいつをクリック。

すると、画面下に吹き出しことにカツコいい狼獣人の大きなイラストが。

NPC、初心者訓練士

【やあ！獣化伝の世界、獣界へようこそ！君にはこれから世界にはびこる邪悪な動物達を退治して貰いたいんだ。僕の頼みを聞いてくれるかい？】

はい

いいえ

これは……初心者チュートリアルだな。
初步的な事を教えてくれる便利な機能だ。

はい

NPC、初心者訓練士

【そうか、ありがとう！所で、君はまだ戦闘を体験した事は無いだ
ろ？街の外へ出てマウスを5匹狩つて来てくれ！】

クエスト開始

マウス5匹の討伐

早速クエストか、まあどのネットゲにもある事だ。クエストを面倒臭
がついたら始まらない。

俺は肉球の形のカーソルを動かし、街の外へと飛び出した。

さて、クエストを開始するのも良いが、とりあえずはあいつらを探
さないと。

狼族、F A R ……聖職者。

いや、見当たらん。いつまでも立つ所に居やがれ。
いない奴を探してもどこにもなうない。俺はクエストを進める事に
した。

その内、ぱたり念つわ。

マウスは簡単にハサフヒ、ドリルなんかに出でくるスライムと同じ、
雑魚敵。

モンスターがレベル1の時点で、回復なしで連戦をしなければ負け
る事はまず無い。

装備の一覧を開くと、色々やかだが武器と防具をつけている。

胴：レザーアーマー

武器：木の枝

他：空欄

初期武器はやはり、酷い物だ。

まあつけてるだけマシだと思つ。色々なゲームを回ればそれが分か
る様になるから。

それと、このゲームはモンカウントバトルでは無く、シームレスバ
トル？のようだ。

プレイヤーの歩くフィールド上に、モンスターがわんさと溢れてい
る。

まず手始めに。

俺は一番近くにいたマウスをダブルクリックして、キャラを攻撃モードにした。

敵をキャラが木の枝で殴りつけると、敵の頭上に俺のキャラの『えたダメージが飛ぶ。

勿論反撃をしてくるため、それは俺のキャラも同じことだった。

僅か3発ほどで呆氣無く昇天したネズミにゃ田もくれず、次々とマウスに奇襲を仕掛ける。

5 / 5 4 / 5 3 / 5 2 / 5

パアアツ！

その効果音と共に、キャラの頭上に「バーン」という文字が浮き出る。最初は上がりやすいんだよなあ。

俺はクエストの報告のため、街へと一回引き上げることにした。

NPC、初心者訓練士

【やあ！お疲れ様！初めての戦闘はどうだったかな？これからは街のNPCからこんな感じでクエストを頼まれるんだ。その時はよろしくね！

戦闘体験も終わったことだし、君はもう十分旅立つ準備が出来ているね】

いやいや、ネズ公5匹なんて猿でも出来るよー……落ち着け、俺。NPCに突っ込んで仕方ないだろ。

NPC、初心者訓練士

【そこで、まだ幼い獣の君に、試練を下せる。
また街の外へ出て、今度はバタフライを8匹狩つてきてくれ】

クエスト開始

バタフライ8匹の討伐

今度は蝶か？

クエスト欄を良く見ると、

報酬：木刀 攻撃力 + 15
とある。

お、武器がもういるのか。いつややうなわざだな。

俺は再び街の外へと出て行った。

この手のゲームだと、お皿のモンスターを探すのに一苦労する事がある。

位置を覚えればいいのだが、最初は誰でも躊躇所。

別に攻略サイトでも何でも見れば良いと思つかもしないが、まずはマップに慣れた方が良い。

バタフライ、バタフライ。

蝶々、蝶々。

マップ内はそんなに広くなく、探していたモンスターは難なく発見出来た。

木の枝を振り回し、俺のキャラは奮闘する。

その動作をみていても、何故か可愛らしさと思つてしまつ自分がいた。

……あるえ、カッコ良く作ったんだけどなあ。

8匹の討伐は意外とあっさりと終了した。さて、クエスト報告……つと。街へ向けてエリア移動しようとした途端、そいつは現れた。

熊族で、この身なりは盗賊か。

キャラの足元に、名前がある。BEAR、熊？と、突然そいつから内緒チャットが送られてきた。別のゲームでは1：1とか言つたりウィスパー、耳打ちとか言つたりもする。

【内緒 TIGER】BEAR・虎獅？

……熊、盗賊。

そうか、こいつは秦江か。

俺は結構タイピングは速い方だ。5秒と経たずその質問に返答した。

……カタタタ、カタンッ

【BEAR 内緒 TIGER】BEAR・うん。お前、秦江だろ？

【内緒 TIGER】BEAR・おうよ。まだ転職してないのか？もつ延待つてゐるぜ

【BEAR 内緒 TIGER】うわッマジで？俺だけ乗り遅れたのかよ。ちょっと熊公手伝えー！

転職とは、ゲーム内でいくつかに分かれた職業になる事で、転職するとその職業固有のスキルを使えたり、装備を使用できたりする。俺は他の一人も呼んで、PTを組んで三人に手伝つてもらい、最終的に転職クエストまで手伝つてもらつた。ついでに装備も新調して、戦士の鎧を身に着けた俺のキャラが眩しく見えた。

【P-T】 TIGER：いや、助かつたわ～
マジせんきゅーみんな

【P-T】 BEAR：お前はいつも遅れてるんだよなあ

【P-T】 FAR：まいいじょん！虎獅も戦士に転職できたし、ダンジョンのボス狩り行かない？

【P-T】 AIR：いいね、全職集まつたら余裕でしょう（＊・＊・＊）ノ

【P-T】 TIGER：よっしーみんなで行こう！

その後、俺達は学校があると言つたのに朝方まで「獣化伝」を続けた。

正直、ネトゲでこんなに楽しく遊んだのは久々で。

朝方までやつていて当然の如く次の日の学校も遅刻したのは、仕方ないと思つ。

反省はしているが、後悔はしていない。それだけ、楽しかったから。

第一章 異変

「虎獅いー！何回起いせば良いのアンタは…もう8時15分よー。」

母さんの怒号が飛んでいる気が……。いや、実際に飛んでいるのか。それにしても毎度毎度変わる事の無い声量で。私の耳の鼓膜がはちきれそうですよ、お母様。

今日の朝は俺を起こすと直ちに命令を果たせなかつた田原まし時計を、一警。

いえ、お母様、今はまだ8時13分でござります。四捨五入して息子を惑わすな。

あぐびを一つ、伸びをすると強張つていた骨の節々がパキパキと悲鳴をあげる。

首を傾げ関節を鳴らすと、少しだけ頭が覚めたような気がした。

おまけに手の関節も、毎朝の習慣として鳴らす。

それから俺は遅刻上等でのつそりとベッドから起き上がった。

遅刻は遅刻、いつも学校に行こうと変わらないから、少しでも遅れて行こうかと。

「……おはよー母さん。朝飯はー？」

落ちようとするまぶたをこすりつつ、俺はリビングへと向かった。

何かを焼いた様な、香ばしい香りに眼を細める。

「鮭！早く顔洗つて！」飯食べて学校に行つてきなさいー！
「へいへい……」

母さんの言葉も軽く右から左へ受け流し、洗面所へと向かう。顔を洗つて眠気がパツチリになるのなら、徹夜で勉学に励む学生たちは毎日の様にやつているだらうな。そんな下らない事を考えつ、蛇口を捻つて水を出す。

冷たい水を顔に打ち付けようと、俺の凄まじい眠気は打破出来なかつた。

近くに掛けてあつたタオルを手探りで引っ張つて顔を乱暴に拭ぐ。

「…………ん？」

洗面所にありがちな、大きな鏡に映る影に、俺は微かな違和感を覚えた。

「…………と…………？」

薄い青のタオルで顔をゴシゴシと吹いている、黒の毛皮に白の縞の、俺の様に細い虎の……獣人？

この場にいるのは俺だけのはずだ。

その考えに行き着いた途端、背筋を駆け上がる異常なまでの寒気。

「う……うわっ……！」

一步後ろに足を引いたのは、そいつも同じで。……そいつはビックリ見ても、俺だ。

幻、覚？

自分の手を見つめてみると、いつもと何ら変わる事の無い、「人の手」。

ならばあの虎は？

そう思つて鏡に視線を戻した。

「…………」

いる。きっと今の俺と同じ表情をした、俺と同じ体格の、黒い虎の獣人。

俺と同じ格好。額に右手を当て、苦い顔をして頬からは水を滴らせている。

「なん……で……っ！」

……どうなつてんだ。

あれは……俺が昨日作成したキャラにそっくりじゃないか。

黒地に白縞、黄色の目、少し長い毛足。

服装は俺と変わらないパジャマだったが、あれは明らかに……

俺が作ったキャラクターだ。

第一章 共通点

朝から変な物を見た。

俺の様で、そうじやない異質な物を。

俺はその日はどうも学校に行きたくは無かつたが、他の三人にも変な事が無かつたかを聞きたくて、登校した。

家から学校まで小一時間。

職員室に直行して、例のあの面倒な書類を書いて貰う。

「……中村、今日顔色悪いぞ？夜更かしなんてするなよ」

担任の坂田は本当に心配そうに俺の顔を覗き込む。

「ああ……ちょっと睡眠不足なだけです」

それでも尚心配そうな顔をする坂田に頭を下げ、職員室を後にした。今日はいつもより大幅に遅刻だ。あと三分で一時間目が終わる。

……あいつら全員来てるかな。

一時間目終了を告げるチャイムが校内に響く。

俺は授業終了の挨拶をみんなが終える頃合を見計らって、教室に駆け込んだ。

「……虎獅！」

藍琉だ。

いつもより明るさに欠ける暗い表情をしている。
教室の後ろの方から入ったが、何故だか後ろの方にあの三人が固まっていた。

「よし。どうしたお前ら。後ろに固まつてさ」

「ああその事についてだ。来い」

明るく話し掛けた俺の腕を、奏江がぐいと引っ張つて行く。

「ちよ……なんだよ、かな……え……？」

「いいから。資料室行くぞ」

資料室　?

何であんな人気の無い所に……。

まさか。

遥霞を見ると、遥霞もまたやつれた顔をしている。

それに奏江のこの態度。

眉間に、きちつと刻まれた皺が、事の重大さを物語っていた。

「ここに何があったのか？」

資料室は生徒の教室のある所から少し離れた所にあり、近寄る者は少ない。

そんな所に行つて話があると言つた事は、余程の事なのだろう。

「…………」めんな、虎獅。でもすぐに話せなきゃならなくてさ

俺の腕をそつと放した奏江は、済まない、と言つかの様に肩をすぼめた。

「いや、緊急なら仕方ないだろ。それに、話つてなんだよ？」

俺がこう切り出すと、着いて来た藍琉と遥霞は俯いて奏江は眉根を寄せてしまった。

しばしの沈黙は、身じろぎをする事すら躊躇われた。

沈黙を破ったのは、遙霞。

「……今朝、俺達は鏡に映る獣人を見たんだ。それぞれの作ったキャラクターにそっくりの」

ああ、やつぱりお前らも。

「俺達3人が全員同じ様なことを言つから、試したんだ。男子トイレにある小さい鏡で。

その鏡に3人で映つても、そこには狼と熊とライオンの獣人しかいなくて」

ゆつくりと話す遙霞はどこか苦しそうだ。

見ていると慰めてあげたくなる程、気落ちしていた。

「……このままみんなに何かあつたら、獣化伝を薦めた俺のせいだ

遙霞はひとつひとつ自分を責め始め、今にも涙腺が緩んでしまいそうだ。

「そんな事ねえよ。それに、まだ俺達には何の危害も無いだろ？大丈夫だよ」

そんなの、一時の慰めにしかならないとしても。

「俺も、朝洗面所で顔洗つてたら見たんだ。黒い……虎の獣人をさ

途端、3人の顔が引きつる。

「お前も……か」

奏江の額に深く皺が寄せられる。

もし鏡に映る幻想が真実ならば、俺達は今後人として生きてはいけないかも知れない。

「本当に獣人になつたらテレビに出まくつてやるひざー。」

でも、こいつらが沈んでいるのなら、俺だけでも明るく氣丈に振舞わないよ。

俺はこいつらの仲間だから。

「…………そうだよね。まだそうと決まったわけじゃないし」

「同感だな、藍琉。遙霊もそつだう？」

「うそ。でもちよつと氣になるんだけども」

一番心配な遙霊は、自分の疑問に思つてこむ事を口にした。

第一章 疑問

その疑問とは。

「俺達が獣人として鏡に映った姿を、ゲームをやつていの他の奴が見たら見えるの？」

……成る程。

関係者にのみ見えるのであれば、何かが起こったときに巻き込まれるのは俺達だけの可能性が高いかな。

「……確かに気になる所だな。試してみよ。」

「おい奏江、もし見えた場合の対処は考えなくとも良いのか？」

「ん? どー言う事だ、虎獅」

全く。

俺達の中で一番馬鹿なのはやはりここにいるようだ。

「詰まり、簡単に言つと。

他人に見せる 鏡に獣人が映る そいつはどうな反応をするか分か

つたもんじやない、だ

とんだ一大事にならないとも限らないって事だな。

「ああー……そうか」

「ん~、それは確かに」

疑問を述べた遙霞ですら頭を抱える始末。

「……じゃあ口数の少ない人、日頃反応の薄い人で試してみたら?」

藍琉はたまにいいアイディアをくれる。たぶんこの中で一番頭がキ
レるんじゃないかな。

結果、藍琉の提案は採用された。

「へえ。口数の少ない奴、ねえ。風見はどうだ?」

俄然乗り気になってきた秦江は、先程までの暗い雰囲気を吹き飛ば
した。

中々良いかもしない。

そいつに獣人なんて見えなければそれで良い。

「「良いんじゃね？」」

と遙霞＆俺。

「藍琉は？良いか？」

「うん。僕も風見君なら大丈夫じゃないかなって思つてた」

ターゲットは風見雷藤【かざみらいどう】

クラス一……いや、校内一無口なちょっと暗い奴。

風見は授業中以外は大抵読書で席を動かないため、誰か一人が連れて来なければならない。

四人で行けば何かを企んでいるかも知れないと思われるからな。

「虎獅、僕が風見君連れてくるから、みんなは見た時の言い訳考
えておいて」

「……ここのか、藍琉？」

俺は、藍琉も入学当初は暗い奴だと思っていた。

初めて打ち解けたのはあの1年の冬の時、ゲームの話でみんなが仲良くなつてからだ。

口下手で、喧嘩なんかは御法度の藍琉だ。無事にあいつを引っ張つて来る事が出来るのかが心配だが。

「風見君とは何回か喋つた事があるんだ。……やつと来てくれるよ

そつ言ひでじこか自信無さ氣に、でもじこか自信に満ち溢れた藍琉を、俺達は男子トイレから見送つた。

こんな事をしてはいるが、腕時計を確認すると、残り時間はもう二分も無い。
……資料室に長居しそぎたな。

「チラッと見せるだけで良いんじやないか？それからダッシュで席に着こつ

そんな奏江に、そうだなと俺と遙霞は頷いて藍琉達を待つた。

廊下から話し声がする。

「……で、何か見えても驚かないでね」

「…………うん」

でかしたぞ、藍琉！

男子トイレに入つて風見を招き入れた俺達は、藍琉にグッジョブと
親指を立てた。

第一章 鏡

……もう時間が無い。

俺達四人は男子トイレの小さな鏡の前に並んで立つ。その四人の間に風見がちょこんと立っている。

一番左端で映る俺。相変わらず、鏡の中の俺は朝と同じ、黒い虎。
……制服も中々似合うなこいつ。

そして、鏡の中には右から灰色の狼、紺色の熊、白いライオンの獣人が、それぞれ並んでいた。

みんなその体躯に見合った俺と同じ制服を着ている。

俺達を映し出す鏡の中には、風見以外の人間は居なかつた。

……何も起こらなければ良いが。

「風見、何か見えるか?」

早速俺は風見に問い合わせる。

ヤバい、2時間目開始まで40秒。

「…………何も見えないよ」

俺達は一斉に安堵の溜息を吐いた。

「…………でも」

ん?

「…………なんかここ動物臭い」

これはヤバい。

ギリギリセーフでチャイム着席を遂げた俺達は、それぞれに危機感を募らせていた。

『動物臭い』

あの場で俺達はトイレの異様な臭いしか感知していなかつた。よつて、動物臭いのは……俺達だ。

授業が全て終わり、俺達は昇降口から一緒に出て、チャリ置きまでその事について議論した。

「誰か犬猫飼つてるか？」

俺の問いに、藍琉と遙霞は首を横に振る。

「俺ん家飼つてるけど外だぜ」

……なら、何で風見は動物臭いだなんて言つたんだ。

「僕達に変化が現れてるのかも」

「藍琉、お前もやつ思つか?」

「……クソッ、動物臭いまま学校なんて通いたくは無いぞ。

「まあ明日になれば何かが変わるかも知れない。今は待とうよ」

遙霞は俺達をなだめ、今日の予定を俺達に聞いた。

「じゃ、今夜はみんなでレベ上げだねー5時半にレオンベルガー像の前でー。」

身体に異常が起つとも、俺達はネトゲをやり続けるだろうな。

第一章 PT【パーティー】

「さて。5時半までは……後30分はあるな」

集合時間まで一人でレベル上げでもしよう。

キャラクター選択画面で

【TIGER Lv12】

を選択、昨日落ちた（ゲームを終了する事）所からスタートだ。

所で、昨日は触れなかつたがこのゲームはやたらと人が多い。

狩場へ赴けば敵の取り合いは早い者勝ち、

中央噴水前の露店エリアでは、常時何千と露店放置を慣行するプレイヤーがいる。

目当ての物が高確率で手に入るのは良いが、何よりこのハイスペックのゲームPCでも重いとは何事か。

適当にクエストをNPCから受けて、いざ街の外へ。

今からやるクエストはLV9のモンスター、イタチ15体の討伐。段々とクエストで狩るモンスターのLVと数量が上がって来ている。数量を狩れば狩る程経験値が溜まるが、同じ作業を繰り返していると眠くなるのが欠点だ。

そう言えば、昨日LV10で転職クエストを終えた後、ダンジョンのボス狩りに行つたが、かなり楽しかった。ボスが雑魚モンスターを召喚して来たり、何分かに一回か高威力スキルを使つてきたり。

その高威力スキルで奏江は一度死んでいたような気がする。低LVのボスモンスターなのに中々スリルがあつて、高LVになつて強いボスを狩るのが楽しみだ。

「……こいつで最後かな」

俺のキャラが、新調した戦士用の剣で最後の獲物を狩る。

戦士は、ほとんどのゲームで防御力、HPが高く、初心者でも扱い易い職として親しまれている。

ダンジョンなどに行く時は、PTメンバーを守る壁役としても活躍する。

が、その反面攻撃力が弱かつたりだと、魔法防御が弱かつたりだとか。まあ様々だ。

ぶつちやけ回復役と戦士が居れば大抵のゲームは困らないものだが、それは個人の自由である。

一長一短はどんな物にあるし。

職業別の苦労だって、その職をやってみないと分からぬ。

俺はクエスト完了NPCの元まで走り、報酬として500Gと経験値をもらつた。

金はあつても困らない！

獣の次に好きな物はお金です。

画面の右下を見ると、5時25分。

丁度良いか。中央噴水前のレオンベルガー像に向かおう。

街の中心部であるレオンベルガー像の前に行くと、もう3人はいた。

狼と熊とライオン。

そして、その内の熊の野郎から例の如く内緒が来てる。

【内緒 TIGER】BEAR：よつ。PT作ってくれよ

】BEAR 内緒【TIGER：おう、了解

PTとは、その通りパーティー。

どうやら1PTの定員は8人のようだ。

PTを他人と組むと、経験値の共有、アイテムの分配、その他様々な恩恵を得られる。

特にLV上げだと、PT人数に応じた経験値ボーナスがついたりして、尚良い。

俺は手早くPTを作り、奏江……じゃなくてBEAR、AIR、F ARの順に誘う。

大体適当だけどな。

全員誘い、画面左側に表示されるPT一覧で確認。チャットをPTチャットに切り替えた。

【P-T】 BEAR：ビーバー狩る？

【P-T】 FAR：紅兎平野【こうとくひのや】は～あれ～なう～>1
0～18歳～じやん？

【P-T】 AIR：僕は構わないよ～

【P-T】 TIGER：俺も～早く行こう～

第一章 Lv上げ

と言ひ事で、俺達は獸王街からそんなに遠くない紅鬼平野に向かう事にした。

WIKIと呼ばれる攻略サイトを見ると、紅鬼平野は確かにLv10～18のモンスターが出現する。

一つのマップに必ず存在するボスモンスター、このマップは、Lv18の「ゴスロリウサギちゃん」だそうだ。

……ひょっとネーミングセンスがあれだけビ、そこはスルー。

4人で固まってマップを通過する。今居るマップは、昨日マウスを狩った初心者マップ、黄鼠草原【おうそそうげん】

一つ一つのマップが大して広くない為、エリア移動は楽だ。マップを移動すると、各自バラバラに散つてモンスターを狩り始める。

PTメンバーの現在地は画面右上に表示されるマップを拡大すれば良い。

今の俺のLvは12。

B E A Rは14、F A Rは一番最初にやり始めたから16、A I Rは15だ。

いつも俺が一番下だよなーと思いつつ、同じレベルのモンスターをクラビット狩る。

どいつもこつも敵の名前が適当だな。まあ狩れれば関係無いけど。

モンスターのドロップ品は拾つて少しでもお金に換える。

運良く装備品が出たら高い額のお金になるし。

このゲームは回復薬を露店で低価格で買えるが、戦闘での薬の消費は激しい。

何故露店で回復薬が低価格で買えるのかと言つと、「生産」と言つスキルがあるからだ。

武器、防具、回復薬、アクセサリー。このゲームでは必要な物は大抵生産できてしまつ。

それによつて広がるプレイヤー間の交流、生産依頼、生産代行なんかもあるから、いかに重要かがわかると思う。
この様な機能は最近になつて重視されて来た物で、今では生産は必要不可欠な物になつてゐる。

狩り始めると、当初LV1-2の経験値26%だったのが、直ぐにLVアップ。

みんな次々とレベルが上がり、一番高LVのファーにはみんなに合わせてもらつた為にマップ移動してもらつた。

いや、俺はそんな可哀想な事言つてない。ベアが言つたんだ。

【P-T】BEAR・おいつらーーお前だけ」▼16だなんて卑怯だぞー(ヽ、ヽ)

【P.T】F A R・ええ・・・仕方ないじゃん、俺が最初にやつてん
だからあー

俺達はゲーム内ではお互にこの事をそのゲーム内の名前で呼ぶ様にしている。

その方が雰囲気出るし、何より現実から逃避できるんだもん。

第一章 嘘つきの洞穴

眩い光と共に、「LVUP」の文字が俺のキャラクターが更に強くなった事を知らせる。

【P-T】 TIGER：おっし、俺もLV20になった！

【P-T】 FAR：おめでとーたいがー（。。。。）ノ

【P-T】 AIR：おめでとう～これでみんなLV20になったね！

【P-T】 BEAR：だな！またボス狩り行こうぜ！

LV20にするため、全員次のマップのトカゲの森まで来ていた。みんなで一緒に狩る事が楽しみな俺達は、全員が同じLV帯で行動すると決めた。

LV差があつても最低LV1～3の差に留める様に、みんなで決めたんだ。

より楽しむためにと決めた、俺達だけのルール。

【P-T】 F A R・じや、嘆きの洞穴行く？最下層のボスいけるかも

【P-T】 AIR・行くだけ行つてみよう

【P-T】 BEAR・ボスがいるならどうでも良二…

【P-T】 TIGER・俺も熊野郎にさせーい

嘆きの洞穴

← 帯は ← 10 ← 20

このダンジョンは全3層より成り立つており、それぞれボスが

第一層 ← v13

第二層 ← v16

第三層 ← v20

尚、このダンジョンまでは比較的人気が無いため、ボスを独り占め出来る事が多い。

特に第三層はソロ狩りでは歯が立たず、人気の無さに拍車がかかっている。

しかし、第三層のボスからのみドロップ品として希少価値の高い戦闘ペット入手する事が可能。

だが、それでも人気が無い。

以上獣化伝攻略WIKIより

……最後のそれでも人気が無いって言つのは酷いと思うが。

まあ、

人気が無い

ボスを独り占め

この点では今の俺達にぴったりだと思う。

誰も異議を唱えることは無く、俺達は嘆きの洞穴第三層を田指し、キャラを走らせた。

第一章 ダンジョン

各自事前にキャラの装備を新調し、回復薬も露店で沢山買って来た。

MMORPG……いや、RPGと言ひ物において、ボス狩りは醍醐味とも言えよう。

ボスのいないドラ H。

……どこに面白みがあるんだよ！

と思わず勝手に突っ込んでしまえそくなべらいボスの位置とは重要である。

嘆きの洞穴は紅鬼平原の南に位置し、周囲には他のプレイヤーは見当たらない。

因みに獣王街は紅鬼、黄鼠の北にあり、俺達は南下してきたつて事だ。

【P-T】 F A R : じゃ、先陣切つて行つてくれ、壁役のたいがー君

【P-T】 A I R : 頑張つてね、たいがー(・・・)

【P-T】 B E A R : 盗賊は防御低いからお前に任せせるわ(・・・)

つと。ここで俺の出番が来た訳か。

【P.T】 TIGER：任せとけ、行こう

【P.T】 BEAR：キャータイガー君カツコイイ

……勿論奴は無視する。

熊野郎の特技は相手を茶化す事だ。
全くもつて迷惑極まりない。

進入した途端、画面中央に「テカ」テカとマップ名が表示される。

俺は肉球カーソルを右上のマップに合わせ、次の層に行く道を確認。

意外と広かつたダンジョン内だが、そのルートは一本道をちょっと曲げた感じの物だった。

詰まり迷う事は無い。

【P.T】 TIGER：面倒だから雑魚無視で

【P.T】 FAR：ほいよつ

そう返答があり、ファーはまず自分に補助魔法を掛けた。

長く白いロープを着た可愛い顔の狼の頭上に、スキル名が吹き出しが表示される。

ブレッシング！！

狼の足元に神々しい魔方陣が出現、「防御UP」の文字と共に狼は光に包まれた。

ファーはそれを俺達の人数分繰り返す。前衛（物理職）の俺と熊野郎には、物理攻撃力UP魔法も掛けてくれた。

……いや、俺さつき雑魚無視つて言つたよ……な。「攻撃」は要らないんじゃないのか。

一人ごちる。
まあそんな事は置いといて。

俺は周りのアクティブモンスター（こちらが攻撃しなくとも自動で攻撃してくる敵）を自分に寄せ、第二層入り口まで突っ走る。せめてアクティブモンスターだけでも警戒しないと、いつ防御力の低い魔法職一人がやられるか分からないから。

そのための壁役である。

PTメンバーがやられそなうら、代わりになつて戦闘に割り込むし、俺はそのためなら死ぬ事になつても構わない。

だつてそれが戦士つてもんだから。

第一層を無事に駆け抜け、俺達は第二層へと突入。

やつぱりWIKIの記述通り、普通のフィールドより人が少ない。

と言つより全くいない。

第一層まで走つてきたが、その間見掛けたプレイヤーは〇だ。

【P-T】 TIGER：人が全く居ないな

【P-T】 BEAR：まあダンジョンだからだろ。普通のマップより敵も強いからな

ベアとそんな短いやり取りを交わし、俺達は目的の第三層を目指す。

第一章 第一層にて

第一層の入り口でまたファーに補助魔法を掛けてもらい、少しチャットをした。

【P-T】 BEAR : イツヤほんとにボス独り占めかもな（笑）

【P-T】 AIR : でもドロップ品皿当たる三階だけには居たりして・

【P-T】 FAR : まあまあ、独り占めできたら戦闘ペシト狙おいつよ

【P-T】 TIGER : そつだな。 インのボスドロペシトって種類なんだつたつけ？

【P-T】 FAR : 確か・・・ラビじやなかつたかな

ラビとはウサギ型のペシトの事らしい。 可愛い見た目のため、露店 売却の方が得だとか。

しかし戦闘能力が低いため、愛玩用……まともに育てられる事も無いと聞く。

話を切り上げ、俺達は最下層へと再び走り始めた。

第一層もさほど入り組んだ通路では無く、簡単に駆け抜ける事が出来る。

しかし、第一層にも人影を確認する事は出来ず。本当に人気が無い。

【P.T】 FAR・あ、ちょっとたんま!

【P.T】 TIGER・どうした、ファー?

【P.T】 BEAR・なんだなんだ?

【P.T】 FAR・あれ、こここのボスじゃない?

言われて辺りを見回すと、ああ。

確かに他のよりも大きなモンスターがちょこちょこ歩いている。

肉球力ーソルをそいつに命わせると、

L V 16 血塗れウサギちゃん の表示。

成程、だから赤いのか。

【P.T】 FAR・二層のボス狩る前にさ、こいつで腕試しなんてど

うかな？

【P.T】 TIGER・そりゃ良いや、やるひー・

ここでここを倒せなければ、三層のボスなんてもつてのほか。早速ファーに防御・攻撃UPの補助魔法を掛けて貰い、いざ宣戦布告である。

【P.T】 TIGER・俺が引き寄せて叩くから、回復頼む。あとは適当に殴つて

【P.T】 AIR・任せて（・・・）

【P.T】 FAR・よーしー！殴りだあ！

まずは壁役の俺が突撃。

ボスはみんなアクティブモンスターなので、向こうからも襲いかかって来る。

被害ダメージは大してデカくない。
これなら倒せるかも……！

そう思つたのも束の間だった。

血塗れウサギちゃんは、突然大量のピンクラビット（レバーパン）を召喚したのだ。

ざつと見て、10から……、15匹だな。

途端ボコボコと殴られるが、8つも下の「」の奴にやられる程戦士
だつて柔くは無い。

【P.T】 TIGER：ボスは俺が引くから、雑魚処理頼むわ

【P.T】 BEAR：任せとけ、お前は早くボスを倒しちまえ（汗
）キラッ

【P.T】 AIR：了解了解

この間、ファーは俺に回復魔法を連発するのに忙しかった為、チャ
ットが出来なかつたらしい。まあ、あいつらしいな。

第一章 盗賊と魔術師

しばしモンスターからのリンチに耐えていると、ピンクラビットの数が減つて来た。

ベアとイルのお陰である。

戦士よりも攻撃速度の速い盗賊は、防御力が低い事を除けば意外と強い。

防御を捨ててアタッカーとして攻撃に攻撃を重ねる物理職。しかもMPなども高く設定される事が多く、バンバンスキルを発動できるのも魅力だ。

ベアはその特性を生かし、通常攻撃 スキルのコンボを繰り返す。

そして魔術師は高威力スキルを多数持つ、補助を捨てた魔法職。火力（攻撃力）だけを見れば、全職中トップに立つこれまたアタッカーである。

状態異常魔法も巧みに操り、毒、睡眠、麻痺その他様々な異常を引き起こせる。

しかし、反面ではやはり同魔法職の聖職者より幾らか防御力が劣る面もある事。

以上のデメリットを持つが、高火力魔法に惹かれて魔術師を目指す者は後を絶たないのもまた事実だ。

【PT】BEAR：殲滅完了！

【P.T】TIGER・さんきゅ、これからが本番だぜ！

【P-T】 FAR...おおー！ | 、・・・() ヽ

俺がリンチされた分こいつもリンチじゃ！と意気揚々にみんなでス
キルを放つ。

パワーヒット

ファーはホーリーボイス

ベアはスタンアタック

アイルは
アイスブレイク

それが攻撃スキルを次々に放つ中、当の血塗れウサギちゃんのHPは三分の一を切った所である。

これなら『リ押しすればもう行けるな。今まで観察していくが、血塗れウサギちゃんは高威力全体スキルは使ってこない。

一番厄介だったのはあのピンクラビットの召喚だったようだ。

時折MP回復薬のショートカットキーを押し、常にスキルを放てる量のMPを維持する。

気がつかない所で俺のHPが減っている時、気を利かせてファーが回復してくれる事に改めて感謝した。

【P-T】 BEAR：もつちよいだ、頑張れ！

【P-T】 TIGER：お前に言われなくともな（笑

ベアに何かを言われると、皮肉で返したくなってしまうのだ。

第一章 謎のドロップアイテム

しばりへ血塗れウサギちゃんを呪いていると、遂に倒す事が出来た。倒れる間際に可愛げな断末魔の叫びを上げ、ボスドロップ定番のレア武器をばらばらと落として逝った。

【P-T】 TIGER・おー、お疲れ！＼(。 。)

【P-T】 FAR・お疲れ様(*、 *、 *)

【P-T】 AHR・やつたねーお疲れー(^ - ^)

【P-T】 BEAR・激しくN-!

一通り言葉を交わし、ボスドロップを俺が一応全部回収しておく。喋っていて時間の経ち過ぎでドロップ品が消滅でもしたら大変だ。

すぐに先程のドロップ品をひとつ見る。お、全職の装備が揃っているじゃないか。

これなら不平不満も出ないかな。

特にあの熊野郎。

【P.T.】 TIGER・全職分出たから渡すね

【P.T.】 FAR…やつたー！

武器の詳細は、LV20、付加効果防御力+30と言つ句とも付加効果の良い装備だった。

それぞれにトレードで渡して行き、それぞれから感謝の言葉をもらう。

現在23時6分。まだまだ夜はこれからだ。

次は第三層か?と思ひきや、みんな今日は流石に早めに寝ると云う。
…そうか、明日は一時間目から国語だ。

国語は本来寝るべき教科なのだが、教師がクセモノなばかりに……。

俺も遅刻ばかりだと成績下がるかな。
よし、今日はもう寝よう。

【P-TIGER・じゃ、みんなお休みノシ

三人が次々と落ちる中、俺はと言つと。

先程のドロップ品の中には、装備以外の何かが混じっていた事に気が付いたのだ。

先にドロップ武器をキャラに装備する。

しかし、アイテム欄には今まで見た事の無い物が入っている。

「…………邪獣王の…………魂？」

何だろうか？

アイコンは炎を模した魂の形。趣味の悪そうな紫色であしらわれている。

肉球カーソルをそのアイテムに合わせても説明文すら表示されないだなんて。

俺は咄嗟に癖で獣化伝WIKIを開いて検索していた。

検索結果、該当ページは0件です。

……は？

WIKIに情報の無いアイテムなのか。
何やら氣味の悪い物だったが、これから何があるやも分からぬので、今はまだ持つておく事にした。
さて、風呂入つて歯あ磨いて寝よう。

第一章 変化

ひひひひひ

ひひひひひ

ひ
……

携帯のアラーム機能が鳴る。
寝ぼけ眼でそれを乱暴に切った。

「ふあ～……ねみい……」

ひひひひ！

ひひひひ！

お次は目覚時計の追撃。

止めてくれ、俺はもう起きてるんだ。

目覚時計を殴つて鳴り止ませた。

思わず目覚時計に金槌を振り下ろしたくなる衝動に駆られるが、も
そもぞベッドから這い出す。

ふと鼻につく味噌の香に、空腹を感じた。母さんは朝から早いな。
リビングへ向かうと、案の定母さんが味噌汁を器について朝食の支度をしていた。

「…………はよ」

椅子に座ると同時に声を掛けた。

「あひ、おはよ。今日も鮭なんだけど、昨日のとちがひつと違…」

…」

母さんの言葉が途切れた事に、寝ぼけている俺の鈍い頭が何故か反應した。

重いまぶたをこすりつつ、母さんを一瞥。俺の背後を見て口を開けている。

……なんだ?

「…………と…………ひ。それは何なの?」

やつぱり母さんは俺の背後を指差した。

「はあ？……何だよ一体……」

背後を見ても何もない。

まさか幽霊なんかじやあるまいし。

それでも尚母さんの表情は変わらず、俺は目の前に置かれた味噌汁をすすつた。

……皿一。

この味噌、今日は赤味噌かな。

そしてこのワカメ。増えるワカメなのはお見通しだぜ、母さん。

お、今日の具は大根か。

分かつてんじやん、大根は大好きだぞ。

「虎獅、あんた分からぬの？」

「だから……何の事だよ？」

母さんは正氣に戻り、じんがり焼けた皿そつな鮭を俺の皿の前に出した。

「その……白黒の尻尾よ」

「…………は？」

今度は俺が口を開ける番だつた。

背後では無く腰辺りに首を巡らすと、ズボンの口から上に向かって虎の物とおぼしき先端の丸い尻尾がにゅっと出ていたのだ。

マジかよ…………！

「飾りじゃないわよね？動いてるし…………」

そつと近付いて来た母さんは、俺の臀部から生えるシマシマの尻尾に触れた。

触られた瞬間、その手を避ける様に尻尾を動かしてしまった。

……完璧俺の意思で動く。

実際触られた時、あんまり嬉しい物でもなかつたのが本音だ。
猫の気持ちが分かつた様な気がする。

「これ何なのよ…………」

母さんがまじまじと俺の顔を見ると、再び口を開けたのだ。

今度はなんだよーーー？

母さんは短い悲鳴を上げた。

「耳ーーー。」

「へつ…………？」

思わず耳のあるべき場所を触ると

……無い、耳が。

「な…………い。耳が無いーーー？」

助けを乞ひ瞳で母さんを見上げると、母さんは俺の頭にそっと触れた。

否、俺の「耳」に触れた。

「あんた、どうつけやつたの？
このネコ耳も動くわ。可愛いけど」

クソッ……尻尾は震せても耳は無理だ！
苛々と尻尾を振り、毛を逆立てる。

ここまで俺自身に尻尾や耳が同調していくと、違和感すら感じず
自然に動く。

「あのゲームの……せいだ」

しかし、この程度で学校を休む訳にはいかない。あいつらにも同じ
症状が出ているはずだ。確認しなければならない。

第一章 ハヤシノ、わんこ、ハマセ

もつ金てをわらけ出す様に、恥かしながらも尻尾と耳は隠せずに登校した。

もしあの三人がいなければ早退しても良いくとの許可も母さんにもうつて來た。

チャリで登校する俺の尻尾と耳を見るドライバーや歩行者の視線が痛い。

「……コスプレなんかじゃない！」

尻尾がひらひらと風に弄ばれる。
と、一昨日ゲームの事を教えてくれた日にはいたり出くわした所で
遙靈に会つた。

……灰色の狼のふさふさな尻尾に、三角形に尖る手触りの良さげな耳。

不覚にも萌えた。

馬鹿野郎俺！正氣に戻るんだ！

「やあ、ニヤン！」やん

「いや、誰がニヤン！」やんだ。誰が…」

どうやら朝風呂で頭を洗った時に耳に、制服のズボンを履く時に尻尾に気が付いたらしい。

「いやあ、参ったね。そん時はさあ」

やはり遙霞も他の三人に事情を聞くために勇気を出して登校して來たようだ。

藍琉と奏江は来ているだろうか？

……今は登校する生徒の数が一番多い時間帯の様だ。
昇降口に溢れ返る先輩後輩同級生が、俺と遙霞の有り得ない物を見つめる。

下駄箱から上履きのスリッパを取り出して、教室へ向かう。

「なあ、『やんこ虎獅』

「なんだよ、わん公遙霞」

遙霞の嫌味な言い方に対抗すべく、俺も狼の見掛けに対して言つてやつた。

「そのネコ耳自重しろ、可愛い」

「お前じゃ、そのふさふさは仕舞え！」

そんな俺達一人に、男子からは気持ち悪がるような視線が、女子からは黄色い声がそこかしこで聞こえる。

教室へ行くと、未だ人の少ない空間の中で藍琉と奏江が席に着いていた。

奏江は俺の机の上に座り、藍琉と談笑している様だが。

「よつ、にゃんこにわんこ」

「おはよう。二人共……可愛いね

初っ端からこの話題だ。

挨拶を返し、藍琉と奏江を見ると、

奏江は先端の丸い紺色の熊耳があり、尻尾は見えない。

藍琉には先端に房のついた白い尻尾がついていて、耳は俺より大きかった。

「着々と変わつて來てるよな、俺ら」

シマシマの尻尾の先をいじりつつ、全員の顔を見渡す。

不思議と各々の表情に浮かんでいるのは、負の感情では無く喜々とした期待だった。

俺もどさうかと言つと、これから何が起るのかが楽しみではあるのだ。

「……でもさ、この学校に他にいないのかなあ。僕らみたいな人」

藍琉の呟きに、確かにそつだとみんなが同意して会議が始まった。俺達を不思議そうに見つめるルームメイト達は無視、今は構つていられない。

「先公に聞くのは嫌だぜ？」

「奏江……そりゃそうだけじゃ、俺らで耳と尻尾の生えた他学年の奴なんて探しづらござ」

奏江の主張はもつともなんだがな。何分、全校生徒で千人近い。その中から探し当てるのは無理だろ。

「いや、僕には鼻があるよ」

「……は？」

遥霞の突然な発言に、俺達三人は素頓狂すつとんきょうな声を上げた。

第一章 感覚

「鼻だよ。嗅覚！感覚も鋭くなってるみたいなんだ」

身体以外にもそんな所にも変化があつただなんて、予想外だな。

「！」の間風見が言つてたろ？『動物臭い』つてさ。それを闻れば良いじやん」

「うおっ、凄いなハル！」

「グッドアイデイアだね。遙靈」

確かに臭いを闻れば……或いは。

「そりだな、遙靈。やっぱお前も頼りになる奴だつたんだな、見直したよ」

ぽんぽんと遙靈の肩を叩く。

「……虎獅、『も』つて何？俺だつてたまには役に立つんだからー。」

途端、俺の頬を掠める拳が空を切つた。

華麗な回避で避けるも、一瞬の出来事に心拍数が急上昇。

……遙霞は空手の師範代にもなり得る様な空手の達人なのだ。

本人の遊び心の突きで何度も寿命が縮む思いをしたのか、最早数え切れない。

「は……遙霞、お前の拳は凶器なんだよ！ 気安く突きを出すなあつ
ー！」

「ごめん！」めん、と口だけで反省の色の見えない遙霞に俺は怒りを感じた。ふと、ホームルーム開始を告げるチャイムの軽快な音が教室に響き渡る。いつの間にやら教室にはルームメイト達がわらわらと集まっていた。

「なあ……」

奏江の心配そうな声。何だろ？

「リの耳と尻尾、どうして説明するよ？」

「あ……」

考
え
て
い
な
か
つ
た。

俺達四人は全員で首を傾げるハメに。

その内に担任の坂田が教室に入つて来るなり、俺達それぞれの毛玉を凝視した。

「お前、ひ……。遂にやつぱつ道に田原めたのか。先生は誰しこぞ！」

きっと、そう言つ道=「コスプレだらう。」

すかさず藍琉が反論するが。

「済みません、先生。これ飾り物じゃないんです。本物ですよ」

「馬鹿言つてるんじゃない、佐野。

人間にそんな物が付いてる訳ないだろ？」

軽く鼻で笑われ、あしらわれてしまふ。
しかもクラス中が俺達の事を笑い始めたのだった。

「なら、触つて見たらいどうだ？あ？」

そんな笑いを吹き飛ばす、奏江のドスの利いたハスキーな低音が教室を静めた。

「俺達だって好きでこんな格好してるわけじゃねえんだよー。」

坂田とクラス中に向かって堂々と吠えるその様は、正に田熊と言つてしかるべき。

鋭い目付きの下に、微かな怒りを感じた。奏江は耳の毛をわずかに逆立てている。

「やうひすよ、せんせ。飾り物なりひやつて動く訳ないっすから

続き遙霞が耳をぴこぴこ動かし、尻尾を振りながら畳み掛ける。

俺が部外者なら真っ先に遙霞のそのふさふさの尾に触れている所だ。

「……そのままひづのなら触ひつ

途端真顔になつた坂田は、恐る恐ると言つた感じで遙霞の尾に手を伸ばした。

ふわりとした手触りなのだろう。

触れた瞬間は手を引っ込んだが、今度はその感触を楽しむ様に触り

ている。

「ほ……本物なのか……？まさか……」

坂田の顔に驚きと笑顔が浮かび、俺達四人は顔を見合させてにいつと笑つた。

第一章 ライカンスロープ

坂田の反応を見て、俺達を見つめるクラス中の奴らの目が変わった。

「だが、どうしたんだ？お前らだけに……その、耳と尻尾が付いているだなんて」

この質問が一番厄介なのが。

先程の会議で、キレ者の藍琉にこの危機を脱する言い訳を言って貰う手はずだ。

だが、藍琉も自信は無いとの事。それは仕方無いと俺達は藍琉を慰めた。

「……何故のかはお話出来ません。

しかし、これだけは言えます。僕達は何者かの陰謀に組み込まれた、言わば被験体

「おお、何か真面目っぽい説明だな。

これは上手くみんなを誤魔化せるだろ？

「今はまだこんな可愛い物です。しかしこれから何が起るかは分

かりません。

皆を巻き込む訳にもいかない。これ以上はお話出来ないのです

数回頷く坂田の反応を見る限り、納得はした様だが、追及されやしないだろうか。

「……そうか、大変だな。その事については職員会議で説明しておこう。頑張れよ」

その後ショートホームルームを終え、坂田は立ち去つて行った。
事態は急展開を迎えつつある。

……まさか職員会議にまで持ち出されてしまつとは。

坂田が去つた後、俺達は黙々とそれを寄せ合つて話し合つ。
最初に口を開いたのは、藍琉だった。

「……ごめん。口クな事、言えなかつた

「んなこたあねえ。お前にしかあんな上手い事は言えなかつたさ」

奏江の、慰め方は乱暴だが、どこかなく暖かみのある言葉。

「甘く見て貰っている内が華や。今にもこの現象は世の中の表に出る……。やつなれば結果的につなってるよ」

頬杖をつきつつもつともな事を述べる遙霞が、言下に不敵な笑みを浮かべた。

「……ライカンスロープ、獣化病……」

俺の口をついて出た単語、ライカンスロープ。遙か昔ごどこの国で起つたと伝えられる、伝染病の名。

「いや、ライカンスロープは伝染病。
俺達はゲームを通してこの姿に……？」

三人は何事かと俺を見つめているが、俺は構わず先を続ける。

「伝染病……疫病……電波……。ん……電波？
ゲームを通して？」

無意識の内にネコ耳ならぬトラ耳が遙霞の様にぴこぴこと動いている。

「あれは……本当にゲームなのかよ」

顔をしかめて一人呟く俺に不審な目を向ける二人も、その言葉に首をかしげたのだった。

「あのゲームが電波を流してるって事？」

藍琉の問い。

「わからねえ。だが、俺はそうとしか考えられない。じゃなきゃ」

んな事には……」

「」「ハー、授業始めんぞー席に着かねえなら赤点にすっからなー。」

俺の発言を上手い所で中断する、大きくて野太い野郎の声が。

「ひつ……今日は水曜だったな、金森か」

奏江が実に不機嫌そうに唸つた。

無理もない、金森は親戚である奏江に何かと突つ掛かって来るのだ。
「くおーあつ奏江！ 貴様は勉強もしないくせに教師に文句をつける
なつー！」

奏江を指差し叫ぶガタイの良い国語教師（24歳）は、今日も絶好調の様である。

若々しいのは良い事だが、やかましいのは迷惑だと思つぞ。

「は？ ひつせーな。早く授業始めれば良いだろ、タロー」

「くつ……一今に見てるよー。」

悔しげに歯をしつをする金森を尻目に、奏江は退屈そうであべぎを一つ。

「はいはい、構つて欲しいなら家に来い」

「えー？ 言つたな！ 絶対行くからな！」

しかしながら、奏江は人のあしらい方が素晴らしい。（特に金森について）

ああ、断るのかと思った矢先に条件を付けて承諾する所が良くある。その条件も大してハードルの高い物では無い事が多く、奏江に振り回される者は何かといひのだった。

第一章 金森

何故か終始嬉しそうな顔の金森の授業が終わり、皆一斉に席を立つ。

「奏江、後でお前ん家行くからなー」

「わーかつとるわー。お袋に言つとくよ。」

奏江に笑顔で手を振り、国語教師の金森は職員室へと引き上げて行つた。

「……全く、金森の奴デレやがつて」

「金森せんせ、奏江に随分懐いてるね」

くすりと笑う遙霞の横で、奏江はうんざりそうな顔で眉をひそめる。元気無さ気に熊耳を伏せる様を見ると、相当参つている様だ。

「あいつ、俺以外に懐かないんだわ……。相手になる俺は精神が擦り切れちまう」

ぐて一つと机に突つ伏した秦江を無邪気につつく遙靈……、微笑ましい限りだ。

「可愛いじやないか、あんな『カブツ』が『レ』るなんて」

「とーらーじー……。お前は俺の苦労を知らんからそんな事が言えるんだ……」

物凄い形相で睨む秦江を、俺はなんとか静めて落ち着かせた。
それよりも、金森は俺達のこの姿を見ても何ら反応を示さなかつたのは何故だろうか。

まあ細かい事を気にしない金森らしいか。

何とか四時間目までの授業を全て消化し、後は弁当を食べれば俺達は探しに行くつもりだった。

無論、俺達の様な境遇の者を。

いつも通り四人で机を向かい合わせに並べて、弁当にがっつく。

……成程、鼻が良くなるとは凄いな。

周囲に溢れる様々な弁当の香りが認識出来る様になり、今まで気にしていなかつた世界に足を踏み入れたみたいだ。

みんな無言だが、いつもと違うのは、より早いペースで弁当を平らげている事。

やはり、同類を探す事を楽しみにしているのだらうか。

「……、駆走様！」

一番最初に食事を終了したのは、奏江だ。流石にここの早食いは勝てそうにない。

弁当をしまう奏江を尻目に、俺含め残り三人は互いに負けじと食り合い。

「……」

次に上がったのは遙靈。へそっ……。

「……、駆走様でした！」

続いて藍琉が俺を置いて行く。

なんどビリはこの俺になってしまった。

「おー……、待ってくれよっ！」

急いで弁当を詰め込む俺を見る三人の顔は、どことなく微笑んでいた。

「おい犬、臭いわかるか？」

「犬じやねえもん。狼だもん」

「こ」は教室棟三階、一学年のクラスが配置されている階である。

「でもさ、熊も結構鼻は利くって前テレビでやつてたよ」

俺一人を利用するなどばかりに、遙霞は自分より背の高い奏江に向かつて言った。

「あん？…そ、うか？」

……じゃあ俺あ三年の所行くから、ハルはこいつち頼むわ」

奏江は面倒臭そうに右手を振り、ズボンのポケットに左手を突っ込んで足早に立ち去った。

ネコ科の俺と藍琉は何をすれば良いのかと遙靈を見据える。

「「」」は俺に任せても、一人は同級生と職員室でその話題を調べて来てくれない？」

名血互いの顔に顎を合ひつて、片手を上げてその場からそれぞれ立ちはぐ。さて、俺と藍琉は……。

「ふー。藍琉どうするよ？」

「俺はどうでも良こから、決めちゃつて」

他人との関わりが苦手そつな藍琉に対し、俺は職員室でもクラスでも調査出来る。

「良いの？……なら、職員室に行くよ」

「おう、了解！頑張れよ藍琉！」

俺は、藍琉の頭を弟の様に撫で、五組まである内の一組から調べる事にした。

第一章 同類

昼休みと言つ事もあり、一階の廊下には殆ど人の姿が無い。一つ一つのクラスを念入りに調べて見るかな。

(三年の所なんかにや来たくなかったが……どうもあの三人以外の動物臭がするしな)

熊耳を生やしたガタイの良い俺を物珍しげに見る奴らには田もくれず、動物臭の正体を探るべく歩く。

他学年の階に他学年の生徒が紛れ込んでいる事を不快に思つ輩も時折いるが、気にしていては何も出来ない。

三年五組から順々に調べて行く。教室に十人もいない。
……三年四組を見たが、ここでもない。

(……ここも違うな。臭いは近付いている、どこかの教室にいるのか?)

天井を仰ぎ鼻をヒクつかせた。

確實にその動物臭は近付いているのが分かる程、臭いは濃くなっている。

虎獅達に良い結果を持つて帰れるかな。

廊下にたむろする先輩らしきガラの悪い野郎共を無視し、三組へと

向かった。

……三組もハズレだ。

続いて二組へ行く。

鼻につく多種の臭いが、俺の好奇心を揺さぶった。

「……！」

席に着いて優雅に読書をたしなむ背の高いあの顔には、見覚えどころか親近感すら感じるのだ。

「鈴凰先輩……！？」

赤坂鈴凰【あかさかりおう】

俺の、中学時代のバスケ部の先輩。

今では挨拶を交わすだけではあるが、かつて互いに励ましあつた仲の良い先輩が……

虎の物らしき白地に黒縞の耳と尾を生やし、その尾を左右に振つて

いたのだ。

入口の扉で固る俺に気付き、ふと目を移す鈴鳳先輩の瞳が大きく見開かれた。

「ちょ……つと、お前……ハセ？」

先輩は読んでいた本を静かに閉じると、席を立ち俺に向かつて歩を進める。

まさか……鈴鳳先輩が！予想外の事態に困惑する。

遂に俺の目前にまで迫った先輩、やはりそのトラ耳と尾は紛れも無く本物だ。

「お前は……熊か、この耳つ！」

「いてえ！！」

何か他に言つべき事があつた……、先輩はいきなり俺の熊耳を引つ張つた。

さり気なく俺にダメージが加わる。睨む様な目付きを向けるが、効果なし。

しかし、次の瞬間……先輩は俺の耳元で、ゆづくつと低く、あの言葉を発した。

「お前も、獣化伝をやつたのか……」

第一章 野生の能力

一年の階に来るなんて、一年に進級してからは初めてだ。
一階は奏江、職員室とかは虎獅と藍琉に任せたのであるから、俺は俺の仕事をしなきや。

「わざわざ、一年の中にもゲームはいるのかな？」

居たら居たでそれは嬉しいんだよね。

狼の耳と尾を揺らす俺を、一年達は当惑氣味に避けて通つて行く。
大氣の臭いを嗅ぐと、虎獅達の嗅き慣れた臭いしか感知出来なかつた。

……一年はハズレかな？

良く注意してもう一度嗅いで見ても、何ら変わること無く。

拍子抜けだなあ。帰ろうか。

俺は来た道を引き返した。

(……ねえあの先輩、遙霞先輩じゃない?
超カッコいい!)

擦れ違ひ様に、一年の女子が俺の事をヒソヒソと隣りの女子に言つ

のが聞こえた。

(本当だあ。可愛いーあの耳と尻尾~)

……ふむふむ。

俺は結構モテているのか?

いやいやそれよりも、先程の事で分かったのは、感覚が研ぎ澄まさ
れて来た事だ。

普通の人間ならば今の小声の会話は聞こえなかつたはず。
この身体になつて初めて感じた。

狼……いや、動物とは凄いものだと。

「……失礼します……」

ガラリと職員室のドアを開ける。

ほんの一瞬だけ集まる沢山の視線に、思わず息が詰まつた。
職員室で聞き込みとは言つても、どうすればいいんだろう。

取り敢えず坂田先生に聞いてみよう。

二年の担任副担任、その他第一学年に関係する教師達が集まる区域へ急ぐ。

「あ……あの、坂田先生」

「ん? どうしたネ? 耳少年」

何やりヤシをいじつっていた様で、僕が話しかけるとマウスから手を放した。

「えと、あの……聞きたい事が……」

本当はスラスラと話したいの。上手く言葉が出て来ないのがもどかしい。

「……その症状について、だらう?」

「あ、はい……」

坂田先生はいつも言つ時だけは妙に勘が良くて、助かる事がある。

「今朝調べた所、全校生徒中、お前達を含めてライカンスローピイを発症しているのは、七人だ」

……ライカンスローピイ？

そう言えば、虎獅も同じ様な事を……。

「お前達のを見る限り、その症状はライカンスローピイ（獸化病）だ」

「獸化病……」

坂田先生は僕の尻尾の先を触り、本物だつて言つんだから凄いな、と言つた。

「しかしだな、ライカンスロープと決め付ける事にもまだ早い。ライカンスロープとは元より、伝染病として遙か昔に西洋で恐れられたものだ。

よつて、伝染病では無い所を見るとそつそつ断言は出来ないんだな

坂田先生は、今度は背の低い僕の頭に生えるライオンの耳をいじり倒し始める。

「はあ…… そんなんですか」

大体は虎獅の呟いていた言葉と大差は無いみたいだ。

「そう言えば朝、どつかの有名人がその症状が出て病院に行つたが、異常無しと診断されたんだってな」

……遙霞が言つてた。

いざれにせよ、この話題は表に出る事になるとかなんとか。

「まあ何の問題も無いなら気にするな。

ただ可愛いだけだから。だが、何かあつたら先生に頼るんだぞ」

「はい、ありがとうございました」

丁重に頭を下げて礼を言い、尻尾を揺らして足早に職員室から立ち去つた。

俺達のこの姿についての噂は、一時間目が始まる前から広がっていたそうだ。

中には突拍子も無い噂まで。

「ネコと合体して身体にネコを飼つてる」

「異世界の獣人に魔法を掛けられた」

「実験のサンプル」

どう解釈されようと痛くも痒くもないのだが、白い目で見られる様な噂はやめて欲しい。

同級生の中から探すとは……鼻が大層良い訳でもない俺からすると、難儀なもの。

「聞き込み調査か。探偵でもあるまいし」

まずは仲の良い奴から聞いてみようか。

自分のクラスである2・2へ向かい、暖かな陽気の差し込む窓際にたむろする連中の中に、割り込んだ。

「斎藤」

髪をほのかに茶色く染めた、それでも硬派そうな見掛けの奴に声を掛けた。

齊藤霧津【さいとうむつ】

小学校から高校までの、いくら切っても切れぬ腐れ縁。

「…………ん？ どうした、ニヤンコ」

立ったまま寝でもしていたのか、気怠げに戸口を開ける、霧津。

「お前までニヤンコなんて言つた。

……それより、一年で俺らみたいな尻尾生えてる奴とか知ってるか？」

ニヤンコと云われて可愛がられるのは御免だが、情報は聞き出さなければならぬ。

「ああ？ お前みたいな奴か？ この学年にいたかよ、真名斗」

霧津は隣りで椅子に座る、

田嶋真名斗【たじまなまと】に話題を振った。

「せうじんざま 2 4にライオンと熊が出たって聞いたよ。三年にも虎が一人、な」

なるほど。田嶋は意外にも情報通な様だ。そつと決まれば。

「悪いな、ちよつから行って来る」

俺は残り少ない昼休みを無駄にしない様に、直ぐさま2 4に向かつた。

情報通りにライオンと熊がいたら、話を聞いてみるだけの価値はあると思つ。

2 4、俺の知り合いはほとんどない。

教室の外からクラスの内部を覗いてみた。

クラスの中心部、並んだ二つの席について仲良く談笑しているのは。

……ああ、あれが例のライオンか。だが、どうみてもあの後ろ姿は女子だろ？。

何故ならあのロングヘア。いかにもって感じだ。

その隣りには、活発そうな顔をした、頭から熊耳を覗かせる少年がいた。

女子とはあまり話はしたくはないのだが、ここは同類と会つ事で、仕方無く話を聞きに行く事に。

他クラスに入り込むのは忍びないが、取り敢えず話だけでもと思いつこに近付いて行く。

教室の後ろから入つて来た俺に気付く様子も無く、耳と尾を揺らして談笑している。

「……うとうん。ねえ朱羽君、今度戦闘ペット狙いに行かない？」

「昭楽が言つたら仕方ないなあ。ラビだろ？じゃあ今日な

どいつもくゲームの話をしている様だ。それにしても、仲が良いな。

「……あの、ちょっと良いか？」

二人に近付いた俺は男子の方の肩を軽く叩き、声を掛けた。

「ん? だ……れ……」

肩を叩いた俺の頭と尾を凝視する。自分達にも生えてこると呟つのに。

「ジーも。一組の中村虎獅っす」

「あ、「めぐら」めぐら。僕は柿沼朱羽【かきぬましゅう】よりじへへ~。」

男子の方、朱羽は熊耳をピンと立てながら軽く挨拶を返す。女子の方に目をやると。

「私は朝日昭楽【あさひあきら】あなたも、あのゲームをやったの?」

……早速本題に突入か。

第一章 朱羽と昭楽

「ああ。……まあな。正直こんな事になるとは思ってもいなかつたけどや」

それは眞嘲氣味に、過去を振り返る様に。

「そんなの、僕らだつて一緒に」

机に頬杖をついて、朱羽と名乗った男子は昭楽のライオンの耳を撫でた。

「私達は幼馴染みなの。朱羽君に獸化伝に誘われてね。やつてみたらライオンの尻尾と耳が生えたなんて、不思議」

「やつぱり、みんな獸化伝をプレイしたからなんだな……」

俺は頭を抱えた。

何故、何の為にこんな事をする必要があるのでない。人間に耳と尾を生やし、一体誰にどんな得があると言つのか。顔をしかめる俺を見て、昭楽は華奢な肩を震わせながらくすりと笑つた。

「な……なんだよ？」

全く、女子はこれだから何を考えているか分からない！
釣られて朱羽までもが一緒に笑い始めたのだから、余計訳が分からなかつた。

「だつて虎獅君、顔はしかめているのに耳が可愛く動いているから

途端、俺は顔を赤らめた。……もう女子となんて喋るもんか。
だが、もう少し会話を続けようと思つた矢先、タイミング悪く予鈴
の軽快なチャイムが耳に響く。

……もう終わりか。後5分以内に教室に帰らなければ。

「機会があつたらまた話そくな。えーと、朱羽、昭楽

「うん、そうだ！虎獅君のキャラ、どのサーバーなの？名前は？」

ああ、そう言えば俺も聞きたいと思つていたんだ。朱羽は空気が読
める奴だな。

「俺のサーバーはWOLF、キャラはTIGERだ」

「了解。僕もWOLFなんだ。名前は恥ずかしいけど、緋熊【ひぐま】」

そう言つて、照れた様に頭をかく朱羽。

互いに情報交換として、メールアドレスを交換。

俺はログインしたらメールを送り、内緒チャットを送つてもうひとつ約束も取り付けた。

「昭楽の名前は、僕を見つければすぐ元分かるからお楽しみに！」

悪戯っ子の様に舌をぺろりと出して俺を見送る朱羽と、微笑む昭楽。彼らと上手く協力していけば、何かと助かる事があるかもしれない。

俺は考え込みつつも、自分の教室である2階へと戻つて行つた。

前の座席を囲む、三人組。何故だか遥霞が俺の席に座つている。

「おこいじりつ。じきな遙霞！」

「あやーやめてえー」

遙霞を俺の席から引きずり下ろすと、遙霞は甲高い悲鳴を上げた（棒読みで）。

「で？虎獅、何か収穫はあつたか？」

言つ奏江の目付きがいつもより鋭い。「これは何かがあつたのかもしれないな。

「まあな。四組の柿沼と朝日。獸化伝をやつてこらうし。熊とライオンだ」

「ライオンの人人がいたんだあ。何か親近感つ」

同種がいると聞きはしゃぐ藍琉に、俺は微笑み掛けた。

「んで、お前らは、俺に聞くへりうじだ、少しはあつたる？」

三人の顔を、順々に見渡す。

「『めん、俺は収穫なしつ！一年を調べたけど、誰もいなかつたんだ』

「やうひか……三年はどうだった？」

俺の問いに深く溜め息をつく様を見ると、これは……確実に……。

「三年は、鈴鳳先輩……赤坂鈴鳳が獣化伝をやつていた。虎だよ、白虎だ」

第一章 七人のプレイヤー

赤坂鈴鳳……、バスケの試合では鈴鳳先輩からボールを奪う事は不可能とまで言わificateいて……。

部活を引退してからは温厚で誰にも優しいと良い評判だった。

まさか、あの先輩が？

俺も奏江との付き合い何度かあつた事がある。そんな先輩が、獣化伝を……。

俺は唐突に、ある事を思い付いた。

「なあ、獣化伝のPTって何人まで？」

そんな俺の質問に、藍琉がきょとんとしながらも答えてくれた。

「八人だね。僕らの他に後四人……。あの三人、誘っちゃう？」

流石に藍琉には見抜かれてしまったか。

「そうだ。あの三人を誘つて、このゲームの謎を突き止めよ！」

「そりゃ良い考えだけどよ、獣化伝のゲーム運営会社に問い合わせ

ても何の返事も無いんだぜ？

奴らがボロを出すまで待つってのか？」

腕を組んで椅子に深く腰掛ける秦江が、不機嫌そうに問う。

「それ以外の道は無いだろ？向こうが動かないなら、俺達が動くまでだ」

俺の発言に、不服ながらもと言った感じだったが、秦江も首を縦に振った。

希望が無い事なんて無い。今、俺達が自分で希望を掴み取るんだ。

「……よし、帰ろう

今や授業なども聞くより、毎日獣化伝の謎について調べたいくらいだ。

俺達は授業を全て終え、帰り支度をして自転車置き場まで歩いている。

藍琉の情報、坂田から聞いた限りでは俺達七人だけらしいから、これ以上学校を調べる必要は無い。

「明日はどうが獣化するんだろ……。
まあ、ある意味楽しみだなあ～」

遙霞の間の抜けた言葉も、今では深刻に受け止める事は無い。
何か進展があるまで、この症状は止まらずに俺達を日に日に蝕んで
行くだろうから。

「獣人……か……」

常日頃、獣人と言ひ架空の存在になれたのならばと思いつをはせる事、
早五年。

……物心ついた時から獣が大好きだった。

狼と聞けば、虎と聞けば、ライオンと聞けば、俺は会話に首を突つ
込む。

始まりは、幼い頃に両親からもらつた誕生日プレゼント。

狼数頭が宵闇に浮かぶ満月に向けて、遠吠えをしている……そんな場面を描いた大きな油絵で。

不器用な父が俺の為にと買ってくれた物。

本物の様で、今にも動き出して吠え始めそうな絵を、幼い俺に誕生日プレゼントとしてくれたのだ。

勿論、どこぞの有名な芸術家が描いた物、まだ小さく幼い少年のために、一枚はたいて買つたらしい。家はそんなに金がある訳でも無かつたのに。

父さんは不器用故に、息子の俺に対してそんな大ざっぱな愛情表現しか出来ない人だ。

もつと素直になってくれれば、可愛いもんだと思うのだが。しかし、その頃まだ外の世界もあやふやにしか掴めていなかつた俺にとつて、その狼の油絵は特別な物になつた。

凛としたあの面構え、田を細めて闇夜を仰ぐ鼻面、力の籠つたあの四肢……。

俺にとつて、その全てが新しい物で。

獣に魅了されたのは、この時からだつた。

今でも埃を被る事無く、その油絵は俺の部屋に堂々と飾られている。

何か心に変化があれば絵を見つめる事が、俺にとつて当たり前になつて行くのに気が付いたのはいつだつたのだろう。

俺の心には、常に獣がいた。

あの時から、ずっと。

第一章 お客様各位

皆家に帰り、早速ゲームを起動する。パソコンのデスクトップにショートカットとして置いてある獣化伝公式ホームページをダブルクリックした。直ぐさまインターネットが開き、初めて見た時と同じように様々な獣人の美麗イラストがちりばめられている。

「ログイン……っと」

パスワードとエロを打ち込み、ゲームを始めよつとは思ったのだが。

……なんだこれ。

公式サイトのど真ん中に、

「お客様各位」

とドドカク、すぐ目に付くような赤い文字が俺の視界に飛び込んで来たのだった。

思わず好奇心に駆られてその警告文のような赤い文字をクリックしている俺。

そのページにジャンプすると……。

「…………ふざけてんのかよ…………クソ…………」

俺は、そのページにぎりぎりと並び連ねられた文に、言葉を失わざるを得ず。

押し殺そうとした言葉も、口の端から途切れで出て来る程、俺は自分が理解したこの文の内容が信じられなかつたのだ。

お客様各位へ申上げます。

現在、「このゲームをプレイすると獣の耳や尾が現れるが、それは何故か」との質問を多くの利用者様から聞いております。

症状：鏡や、反射する物に映る影

身体の獣化

感覚気管の発達

当社はこの症状につきましては、
「これからイベントのため」
とだけお答えさせて頂きますので、ご了承下さい。

尚、この症状は当社の発する特殊な電波により、故意に引き起こしております。身体への悪影響はございませんので、『安心ください。

その目的は後日改めて公式サイトにて公開させて頂きますので、皆様方、どうかそれまでは黙化伝をお楽しみ下さりませ。

運営会社エターナルビースト

「これからイベントのため」？

なら、俺達はそのイベントの出し物かよ。
……しかも特殊な電波？何なんだよ。
早くこの運営会社の目的が公開される事を祈りながら、俺はゲームを起動した。
TIGERを選択、いざ獣化伝の世界へ。

あ、昨日落ちた所は……つと。

…… そうか、嘆きの洞穴の第二層か。

まだ街に帰つて無かつたんだよな。

画面が明るくなると同時に、俺のキャラがフワッと表示される。周囲を見渡すと、あの三人がもうログインしていて、隅っこに固つていた。

【P.T】 BEAR・そつまくばーのゲームのP.Tはゲーム終了しても脱退しないんだな

【P.T】 FAR・そつまくわれると、そつだつたね

【P.T】 AIR・あ、たいがー来た。こん(^ - ^)

【P.T】 TIGER・虎、じんちや (^ - ^)

談笑してはいるものの、三人はあのムカつく文章を読んだのだろうか。

【P—】 TIGER・なあ、お前らあのお客様なんとかってヤツ読んだ？

【P—】 BEAR・ああ。勝手に俺達を出し物にしてみたんだろ。

【P—】 AIR・ヒョウよね、僕達は物じやないの

やはり、みんなそれぞれ憤慨しているようだ。
しかし、何故運営はあのような文章なんかを公開して俺達の怒りを
煽つたのだろう。

【P—】 FAR・みんな事で怒つても運営は向むけてくれないよ

つこでて遙麗のこの一言。確かにそれはそうなのだが。

【P.T】 BEAR：議論しても始まらないやな、二層のボス狩り行くか？

【P.T】 AIR：お、さんせい

考えていても始まらない、か。

俺は頭の中からあの文章の事を追い出し、先を行くみんなの後姿を追いかけた。

一層、二層と簡単な通路が続いてきたのだが、三層に至っては複雑に入り組んでいる。

敵もそれなりに強くなり、みんなで敵を狩りながらじわじわと進むしかなかつた。

俺はみんなを引き連れ、先頭を走る。

が、その時あることに気がついた。

やつベー朱羽にメールしてない…！

そうだった、俺は帰つたらまず朱羽にメールを送り、それから内緒を送つてもう手はずだったのに。

しぐじつたなあ。俺は右手にマウス、左手に携帯を持つて操作を始めた。

取り敢えず、

「今みんなと嘆きの洞穴の三層にいるからちょっと待つて、ごめん！」

と送る。

……朱羽と昭楽、怒つて無ければ良いんだけど。

その内、五分も経たずに朱羽からメールの返信が来た。

「あ、虎獅君。

実は僕と昭楽も洞穴の三層に来てるんだけど、ボスがちょっと手強いんだ。助けに来てくれない？」

なんてナイスなタイミングだよ！

俺は一人歓喜しながら、少し立ち止まって三人にその旨を伝えた。

【P-T】 TIGER：ボスが手強いんだってさ

【P-T】 BEAR：相手が同じ学校の同級生となれば、俺は構わん！

【P-T】 FAR：そうだね、折角虎獅が「コンタクト」とつて来てくれた

たんだし、行こうよ

【ルート】AIR・つんく、楽しみ！

嫌悪感を示したヤツは誰も居なかつた。
……俺は良い友達を持つたもんだ。

【ルート】TIGER・よし、敵無視で突っ走るぞ！

期待に胸を膨らませ、俺達はダメージを省みず敵陣の中に突っ込んでいく。

これを期に、あの一人とももっと仲良くなる事が出来れば、俺としては万々歳だ。

第一章 白熊の戦士と獅子の聖職者

しばらく進むと、俺のパソコンの両脇に設置されたスピーカーから、効果音が聞こえてきた。

そう、俺達以外の誰かが戦闘をしていると言つことだ。その効果音は、俺の黒虎が放つようなスキルの効果音、そして、ファーがよく使う、回復時の効果音。

……戦士と聖職者か。

こちら側には効果音のみが届いているのだが、何故だか効果音を発する主は、こちらに気が付いていた。

【内緒 TIGER】緋熊：来てくれたんだね！僕らをPTTに誘つてくれない？

やはり、効果音の主は朱羽だった様だ。

内緒チャットが来ている事に気が付き、俺は慌てて返答をする。

【緋熊 内緒】TIGER：わかつた。ちょっと待つて

更に進むと、そこには白い熊の戦士、ノーマルカラーの獅子の聖職者がいた。

……朱羽と昭楽だ。

俺は素早く、まずは緋熊を右クリックして、PT勧誘を選択。
続いて隣で緋熊の回復を続けるKatzカツチエeを同じように誘った。

昭楽のキャラの名前は、ビジギの国で「ネコ」の意味を持つと後に朱羽から聞いた。

新たに加わった二人に、他の三人はためらいがちに挨拶を交わす。

【P-T】FAR・よろしく～！

【P-T】BEAR・よろしく～！

【P-T】AIR・一人共よろしくね

しかし、そんな三人に構わず緋熊とカツシュは交戦中の傍ら、気安く挨拶をした。

【P-A】Katzne・皆さんようじくです。カツシュと申しますへへ

【P-A】緋熊・ヒグマ、よろしくー早速ボス狩りしようよー。

何故緋熊がボス狩りを急かすのかと言つて、未だ緋熊はボスに攻撃を受けていたからだ。

緋熊の後ろには、ダンジョンの最奥とだけあって、いかにも強そうなグリフロンが。

すかさずカーソルをあわせる。

L V20 悲嘆のグリフロン

俺達が到達する以前に、緋熊とカツシュがこいつのHPを減らして
いたはずだが……。

グリフロンのHPはいまだ90%以上も残っていたのだった。

これは相当強い相手だな。

俺は直感的に、そう思ったのである。

ファーよりもいくつかの高い武器を装備していたカツュに、
ワンランク上の補助魔法をもらい、俺達は緋熊の援護に回る。

俺、緋熊、ベア、アイルは、グリフォンを一斉攻撃し、なんとかH
Pを削ろうと励む。

戦士である俺と緋熊は、グリフォンの攻撃対象が他のPTメンバー
に移らないように気を付けつつ、スキルを連発した。

【PT】TIGER・堅いな、コイツ！

【PT】AIR・物理も魔法もあんまり利かないって何事さ……

……そう、このグリフォンは異常に防御が高くて攻撃が利きにくか
ったのだ。

これならば、俺達が来た時に緋熊とカツュが助けを求めて來たの
も頷ける。

とにかく、攻撃が通用しないのだから。

第一章 悲嘆のグリフォン

LV20 悲嘆のグリフォン

嘆きの洞穴第三層に出現する、大型ボスモンスター。画面の半分を占める体を持つ。

攻撃力はさほどでも無いが、その防御力、魔法防御力は長期戦への系譜。

攻略方法はこれと書いて無い。

ただ、雑魚召喚魔法や高威力全体魔法などは使って来ない為、大人數で一気にボコつてしまおう。

戦士はタゲ（ターゲット）を取り、PTメンバーへの攻撃を防ぐ。攻撃力が低いとは言つても、戦士以外の職では簡単に倒される。魔術師、盗賊の毒効果のスキルが比較的有効な手段かもしれない。

無効：麻痺、スリップ、足止め

有効：毒、睡眠、上記以外

攻略WIKIを見ても良さげな情報は載つていなかった。

やはりここはみんなでタコ殴りするしかないのか……。

【P.T】 TIGER・イル、ベア、こいつ毒が利くみたいだから
毒頼む！

【P.T】 AIR・はいよー

【P.T】 BEAR・おう、了解つ

今は敵さんのHPを減らす事が最優先だ。

二人に声を掛けた瞬間、まずはベアが毒属性攻撃スキルを放つ。

ポイズンクラッシュユーー！

ベアの頭上にスキル名が表示され、「ズシャンツ」の効果音と共に悲嘆のグリフォンは毒を食らった。

その間も俺達は攻撃をかましていたのだが、いやはや防御力とはここまで使い物になるのかと。

グリフォンのHPは最初に比べて減りはしたが、それでも70%はあるのだからたまげた物である。

【P-T】 BEAR：やべつ毒切れた、アイル次頼む！

【P-T】 AIR・むつけーー（・・・）

いつの間に交わされたのか、画面左下をちらりと見るとベアとアイルのチャットログが残っていた。

上の空で戦闘に参加していても、何故か身体は勝手に動いていたようだ。

考え事をしていた間も俺はスキルを連発し、時折MPを回復していったのだった。

ポイズン！！

藍琉のキャラが杖を振り回し、紫色の見るからに毒々しいエフェクトが発生。

毒の効果は極力継続を続けたい。

途切れること無く続けられる攻撃で、尚かつジワジワとHPを削り取る為だ。

そういうしている内にグリフォンのHPは着々と減少をしているのだが、未だに50%を保っている事に脱帽である。

どれだけ生命力がみなぎってんだよ！！

思わずそうに叫んでしまいそうだ。

スキルを放つ合間、俺は初めて見る緋熊とカツチエのステータスを調べる。

緋熊：熊族戦士 Lv27

所属ギルド：無所属

PT：加入中

Katze：獅子族聖職者 Lv26

所属ギルド：無所属

PT：加入中

確認した所、緋熊とカツチエは俺達よりも長くこのゲームをしていったようで、6、7Lvも格が高い。

そんな彼らでも倒せない敵を、20Lvの俺達が加わったくらいで倒せるのだろうか。

第二章 高威力範囲スキル

しかし、そんな心配も最早皆無になりつつあるのだった。

何故ならば、悲嘆のグリフォンのHPはようやく半分を切ったから。しかも俺達に被害はそんなに無く、回復魔法をするべき聖職者の二名は、仕事が無いのか攻撃に回っている程。

絆熊のHPの減り具合を見ると、成程。

確かにHPが減る速度は遅く、彼らの仕事が無いのも頷けるのだ。本当にただ防御力が高いだけらしい。時間を掛ければ倒せない訳でもないな。

俺はまたスキルを発動した。

そろそろ40%くらいかな、だいぶ減つて来たような気がする。

グゴゴ……、全くもって嘆かわしい！

高貴たる我に対しこの様な愚行を働くとは……万死に値する……！

グリフォン・ザ・フレアウイング……！

俺はその瞬間、自分の目を疑つた。

何……！？

こいつは高威力範囲スキルを使用して来ないはずだぞ！
しかし、田の前に君臨したるグリフォンは俺達全員に向けて、放つ
たのだ。

グリフォン・ザ・フレアウイング を。スキル名は厨一臭いが、
侮りがたし。

その威力は絶大、先程までHP100%を維持していた俺と緋熊は、
20%くらいにまで一気に削り取られてしまった。すかさずカツツ
エとファーの素早い後方支援が入る。

ヒールと言う回復魔法を数回もらい、皆は出来る限り態勢を立て直
す。

カツツエ、ファー、アイルはさほどHPを削られてはいない所を見
ると、

グリフォン・ザ・フレアウイングは魔法攻撃スキルだったようだ。

魔法系職業は魔法防御力が高いため、魔法を食らってもそれほど痛くはない。

しかし、物理攻撃の俺と紺熊、ベアは魔法耐性の低さから大ダメージだ。

【P-T】TIGER:WIKIの情報と違うところ！

【P-1】BEAR・ああ、しかもあんな口詞の事も聞いた事無い

【P-T】AIR・まさか現実もだけジゲームまでおかしくなつて来たんぢゃ・・・

そう……何かが、おかしいんだ。

それでも、態勢を立て直すと再び各自グリフオンを攻撃し始める。先程の教訓では俺、緋熊、ベア以外には何ら危険性は無い為だ。

俺達三人が気を付けていれば、
グリフォン・ザ・フレアウイング
なんて馬鹿げた攻撃は恐ろしくない。

回復担当せんせきていれば態勢なんていぐりでも立て直せるのだ。

【マ】 緋熊：みんなで一気に置み込もう！

緋熊のその一言で奮い立った俺達は、今まで以上に猛攻を始めた。通常攻撃を挟まず、攻撃はスキルのみでバンバン連発する。そして、遂に10%をきるグリフォンのHP。

あんな卑怯な高威力範囲スキルに怯えている訳にはいかないから。

今、ラストスパートをかけよつ。

第一章 邪獸王の魂

ゴゴ……邪獸王様……最早我が力もここまで……魂は何時も貴方様の傍らに……！

悲嘆のグリフオントークは意味深な言葉を吐いて俺達を攻撃して来る。

邪獸王様の魂がお側にあると云つて……死せる命の夢を事よ……

邪獸王の魂だと……！？

グリフオントークの謎の一言が気になり、俺は自分のアイテム欄を調べる。

「…………！」

違う。

これは俺が昨日拾ったヤツじゃない！

「邪獣王の魂・ボス強化メモリ内蔵」

ボスが付近にいる際、このアイテムの効果によりボスを強化します
現在の「邪獣王の妖力」……0個
自分と同等もしくはそれ以上の「~」のボスを狩るごとに妖力が+1
されます

100個集めると……！？

なんだこれは……。

昨日はこんな説明文無かったのに……！

「邪獣王の魂・ボス強化メモリ内蔵」と書かれたアイテムのアイコンを良く見ると。
昨日見たあの気色の悪い紫色ではなく、
血の様に紅い色で塗りたくられていた。

……一体何がどうなつていやがる……！

俺がそんな事をしている内に、とうとうグリフオンは苦しげな呻き

声と共に散つた。

我が命、永久に尽くる事無し……！

どこの輩が叫びそうな台詞とボスドロップをこいつか残し、グリフオンは消滅。

【P.T】 緋熊：お疲れ様！手強かつたね～！

【P.T】 BEAR：おう、こんなに強いとはな

【P.T】 AIR：お疲れえ～（ 、 ）

【P.T】 KATZE：お疲れ様、ドロップはどうする？山分け出来るかな・・

【P.T】 FAR：呪じるでしょう、このゲームは人数分と職業分ドロップするからね

【P.T】 TIGER：じゃあ俺が回収しようと

このゲームは随分とプレイヤーに優しい設定になつてゐんだな。
感心しながらも、カーソルをドロップ群に合わせ、次々と拾つて行く。

……一度俺達と同じ七個分、職業も各自にバツチリ合つた装備だつた。

【P-T】 TIGER・お、本当に人数分と職業分あるな。いい機能だ（・・）

【P-T】 FAIR・さうだね～

【P-T】 BEAR・早く装備よこせんか～！

少しばかりのチャットを交わした後、皆にドロップを配布する。しかし、アイテム欄を見ると……これはまた喧嘩になりそうな物が……。

……そう、戦闘ペットだ。

「ラビ ルバ」 戰闘ペット

小さなウサギの亞種獣 余りにも小さく非力なため、戦闘ではあまり役に立たない

さて、ここはだいした物か。

正直俺は必要無い。騎乗ペットの方が魅力的だしな。

【ルート】 TRIGGER・あのや、戦闘ペットのラビ出たんだけじゃない
する?

俺としては、緋熊がカツツェに渡した方が良いかと。
グリフォンを倒したのは実質彼らだと思うから。

第一章 戦闘ペッタ・ラバ

そう言えれば、今日朱羽と昭楽は「戦闘ペッタを取りに行く」と言つていたはずだ。

【P-A】 緋熊……もういえるなら、昭楽に渡してあげてくれる？

【P-T】 Katenae・朱羽君……氣を使ってくれなくとも良いのに

……なんとまあ見ていろ」つちが恥ずかしくなる様な台詞を……。

朱羽と昭楽が幼馴染みだからこそなのだろうが、自重して頂きたい。

【P-T】 FAR・僕もカツシュちゃんにあげた方が良いと思つ(・。・)

【P-T】 AIR・だね、僕たちだけじゃ倒せなかつたし

【P-T】 BEAR・全くだ。異議は無い！

皆意見は同じ、だな。

俺はカツツェにカーソルを合わせ、右クリックをする。

ステータス
PT要請
フレンド登録
ギルド勧誘
トレード

他にも内緒などのメニューはあるが、大体こんなメニューの中、俺はトレードを選択した。

Katzeとのトレードをします

画面中央に表示された文字。

それが消えた瞬間、トレードメニューが現れる。

俺は迷わずラビをクリックし、こちらが渡す物の一覧、「交換物」の欄へとラビを移動させた。

ラビ以外渡す物は無い為、

「トレード終了」のボタンをクリック。

Katzeとのトレードを終了します

再びその様なシステム告知が現れ、
無事にトレードは完了した。

Katze から ジャベリン をもらつた

……ジャベリン？

【P-T】 Katze・ありがとついざります

しまじくすると、カツシHから内緒チャットが送られていた事に気
付く。

昭楽、か。

女子は苦手だが、この子は本当に良い子だな。

【内緒 TIGER】 Katze・もうつだけ、なのも少し気が引
けるからお礼にね

【Katze 内緒 TIGER・氣を使わせりやつて悪いな・・・
ありがとう

いつか小さな優しさがある限り、世の中捨てたもんじゃないと思
う。

さて、ボスは無事に狩れた事だし……。

【P.T】 TIGER：次は何する？

あ、そう言えばカツチュにもらつたジャベリンってなんだ?
皆の返答が無い事を確認し、俺はアイテム欄を開いた。

ジャベリン

Lv25~

攻撃力 +150

戦士用武器

付加効果：攻撃力 +25

成程。

付加効果のある武器は、このゲーム内ではレア武器とされる。入手経路は、特定のボスを狩る事、精錬、クエストクリア。他にもルートはあるかもしだいが、俺が知っているのは、これだけ。

ふとチャットログに目を落とすと、発言が追加されている。

【P-A】 緋熊・昭楽の欲しがってたペッタも手に入れられたりし、君達のレベル上げを手伝わってくれない?

【P-A】 Katze・そつだね、皆でレベルを30にしてしませんか?

……なんと。

大した活躍もしなかつたのに、俺達のレベル上げを手伝ってくれると言つのか。

第一章 ビースト

【P.T】 BEAR：ありがたいが、本当に良いのか？そっちだって
レベル上げはしなきゃだろ？に

珍しくまともな事を言つてのけるベアだが、内心では手伝つてもら
いたいに違ひない。
誰でもレベルは早く上げたいと思うものだし、俺だつて強くはなり
たい。

それに更に言つと「△30になれば、特殊スキルの「ビースト」を
覚える事が可能になり、ますます楽しくなるはず。

「ビースト」とは、獣人型からそれぞれの種族の四つ脚獣型にモー
ドチェンジをするスキル。

狼の獣人ならば、狼に変化……と言つた感じになる。

「ビースト」の特徴としては、
HP・MPの回復速度の加速
移動速度上昇
攻撃力上昇

防御力の低下

魔法防御力の低下

……などが挙げられる。

しかし、グラフィックではより獣に近くなる為に可愛さが倍増するのがまた魅力だ。

あ、ついつい話がそれてしまつた。……本題に戻ろう。

【P.T】Katzze：私達は一向に構いませんよ、貴方方はどうでしょうか？

【P.T】FAR：そこまで言つてもうらえるなら、お言葉に甘えても良いんじやないかな

【P.T】TIGER：まあ、そうだな。じゃあ手伝ってくれるか？

【P.T】緋熊：もつちろん…どこで狩ろう？

ファーに流され、仕方無く一人に手伝つてもらつ事に。

しかし、大人數で狩りをすると経験値の上がり方が早い事早い事。見る見る内に上昇を続け、気が付けばレベルアップの効果音を何度も聞いていた。

そして、遂に28 Lv。

手が届かなかつた緋熊のレベルに追い付き、更には超してしまつたのだ。

……当の緋熊はもう30になつてゐたのだが。おまけにカツツェも30になつたのだから、実際には追いついてはいない。

更に狩り続ける事一時間

おめでとづ！！30 Lvになりました！！スキル「ビースト」を会得！！

ビーストモード専用スキルを会得！！

ようやく目的の30レベルになつた。

俺を祝うシステム告知が画面中央に表示されるが、構わずに入力一覧を見る。

勿論、新スキルを挙むべく、だ。

見つけたそのスキルを迷わずダブルクリックすると

俺のキャラの足下に小さな白い魔方陣が現れて、一瞬の内に黒い虎へと変化したのだった。

黒い毛皮に白い縞の映える、可愛いようで格好良い……そんな絶妙なグラフィック。

【ルート】 緋熊：みんなおめでとひ、30まで意外と早かったね（笑）

【ルート】 K a t n e：おめでとうござります、みんな可愛いですよ
(*、*、*)

いやはや、これも全て緋熊とカッシュのお陰である。

彼らがいなければ、今頃俺達はまだ20レベル代をまよっていた
だろうから。

第一章 胸の高鳴り

しかし、時間とは時に残酷であり、思い通りになる事など決してないのだ。

【P-T】 緋熊…うわ、もうこんな時間？ 11時だなんて気が付かなかつたな

【P-T】 AIR…あ、本当だ。もう僕眠い…

早々に睡魔に襲われた被害者も約一名。

… そろそろ引き上げ時か。

【P-T】 TIGER…そろそろ終わりにするか？

【P-T】 緋熊…うだね。明日も学校あるし

まだ今日は水曜、土日までは後一日もある事だし、夜更かしはダメだな。

俺達はそれぞれフレンド登録をして、今日もまた床につく事にした。

ベッドに両足を投げ出す俺の中では、あの邪魔王の魂と言つアイテムについての考えが、ぐるぐると渦を巻いていて……。そして同時に、明日起りうる身体の変化への期待が胸を高鳴らせていた。

「あーあ、なんだよこれ。
こんなのは隠せる訳ねえし……」

明くる朝、寝起きの悪い俺の床に一番最初に飛び込んで来た物が、更に機嫌を悪くさせる。

「……今度は右腕かよ……」

そう。獣化だ。

肩から指先にかけて、全面を覆つ黒い毛皮と白い縞模様。

爪も突起物の様に鋭く尖り、そこらのコンクリートはバター以上に易々と切り裂けてしまいそうだ。

まだ変化の無い左腕と比べると、太さも筋肉も圧倒的に逞しく。

……って。

どうやってこの状態で学校へ行けと！？

朝の足りない時間をフル活用、母さんが来る前にじつにか妥当な案に辿り着いた。

そうだ、包帯を巻けば良い。手は手袋でもしていい。

俺は朝飯のトースト、弁当を母さんにバレない様に持ち出して、医療セットの入っている棚から新しい包帯を掘み出した。
制服にちやちやっと着替え、ワイシャツの長袖のボタンを右手だけ留めて、颯爽と家を飛び出す。

勿論手袋も装着し、俺は自転車へと飛び乗った。

遅刻遅刻とは言つが、いつも遅刻をしている訳じゃない。……つも

りだ。

普通に登校する時はホームルーム開始30分前には着く様にしている。

学校に到着すると、俺はまず自転車置き場の近くにあつた男子トイレへと向かった。

朝から家で包帯を巻く訳にはいかず、登校後に巻こうと思っていたのだ。

母さんに、それはなんだつづかれるのは御免だからな。鞄の中から包帯を取り出す。

左手の不慣れな手付きでくるくると包帯を不格好ながらに巻いていくが、所々から黒い毛がはみ出してしまった。

しかし、時間も最早あまり無い為、ワイシャツで隠しながら教室へと向かう。

あの五人はどうやってこの現象を誤魔化しているのだろうか。
いや……それ以前に隠す必要があつたのだろうか？

……急いで。

第一章 右腕

「よ、虎獅。お前も右腕？」

教室に入つて早々掛けられる、奏江の無遠慮な一言。

「ああ、やっぱ隠したか？」

言いつつ奏江を見ると、まくら上げられたワイシャツの袖から覗く、指先までを覆う白い包帯。

「こんな毛むくじら、晒してるのがおかしいからな

奏江は苦笑気味に後ろの一人を呼ぶと、一人もまた包帯を右腕に巻き付けていた。

だよな。「普通」じゃないんだ。

……俺達は、もつ。

その後始まつたホームルームでは、坂田はあまり言及しては来なかつた。
氣を使つてくれたのだろう。

その気遣いがありがたかった。

昼休みまで問題無く授業を終え、弁当を食べてから四組へ向かう。

「昭楽、朱羽！」

「虎獅君つ。行こう、昭楽」

俺を待っていたのか、俺に気が付くと一人は尻尾と耳を揺らしながら軽快に走って来たのだ。

……しかし、彼らの右腕にもまた、白い布が巻かれていた事に、俺は何故か心が痛んだ。

俺の顔を見るや否や、朱羽は俺の背後を覗き見る。

「もしかして昨日の三人も来ててくれた？」

「ああ。顔合せて置かないとかなつてさ」

俺はそう答えたが、実の所はもっと皆お互いに親近感を持つてもらいたくて。

「緋熊の柿沼朱羽、よろしく！」

「カツシロをやっていた朝日昭楽です」

朱羽の気軽なテンションに飲み込まれる、遙霞、藍琉、奏江の三人。しかし、同じゲームをやっている同志である事が幸いしたのだろう、仲良く会話をし始める彼らを見ると、自然と顔がほこりんと来るのだ。

「ねえねえ、僕たちレベルも近いしね、固定パーティー組まない？」

朱羽の思わず発言ではあったが、俺達は迷う事無く了承した。

固定PTとは、ある限られたメンバーでのみ構成されるPTである。固定PTをするメリットとしては、決まったメンバーのみが顔を合せる為、役割が確定して来たり、信頼性の向上、各自で壁役・突攻・補助回復を分担し、ダンジョンでの冒険やボス戦が楽になつたりする。

逆にデメリットを挙げると、他のプレイヤーとPTを組む事が出来ない、ソロプレイが出来ないなどが該当する。

それに、固定P-Tを作ってしまうと、そのプレイヤー達はある一種の組織と化す。

小規模なギルド、クランと考えても構わない。

「じゃあ、それと一緒にギルドも開設しないか？誰かがP-Tを抜けた時に拾える様にさ」

俺の提案は可決されるだろうか。

「良いね！実は僕もギルド作った方が良いと思つてたから」

相変わらずのハイテンションではあるが、そんな朱羽に同意する他の奴もいたお陰でギルドを設立する事になった。

「ギルドマスターは虎獅だね、一番しつくつするよ」

はしゃぐ藍琉の額を軽く小突き、俺は他の奴らを見渡す。

「僕も昭楽も大賛成。頑張れ、マスター」

「俺も朱羽達に同意だね、奏江は？」

全員の視線が一瞬にして奏江に集まる。

「俺にマスターが務まるとでも？」

俺に異議はない、マスターはこいつだ

奏江の堂々たる態度と発言により、俺がギルドマスターになる事は決定した。

実際俺は人をまとめるのなんて苦手なんだけどな……。

第一章 仲間の証

その後何事も無く授業を終え、俺達はゲームを楽しみに各自回家路へと着いた。

皆が腕に巻き付ける白い布は、お互いの存在を確かめ合う印の様に。

はためくその様は、仲間の証。

…… 固定PT、か……。

今までにはいつもの俺達四人組がそうだったのかも知れない。いや、そうだったんだ。

あの時から……みんなと意気投合したあの時から、俺達はずつと一緒で。

四人揃わないと、何も始まらなかつた。
新しくオープンしたゲームもみんなで協力し合つて進めて來たし、
今だつて、そう。

時と友情が埋めて來た俺達四人の溝は、再び深まる事などないのだ。
このゲームが引き起こす何であれ、俺達の絆を……信頼を、引き裂く事は出来ない。

否、させはしない。

……今日は左足。

昨夜あの五人と、次に獣化する場所は左腕ではないかとレベル上げついでに議論をかもしていたのだが、見事にその期待を裏切ってくれたものだ。

しかし、当の左足は正に異形の物。

獣足けものあしと言う物を耳にした事があるだろうか。

四つ脚の獣 犬や猫の 後ろ脚の様に、膝から骨が膝裏へと曲

がり、爪先で歩く様な形になっているのだ。

現に、俺の足が。

俺は虎、ネコ科特有の爪が引っ込んだ状態だ。少し力を入れると、爪がにゅつと現れる。

…… わて、どうした物かな。

もう流石にここまで来ると隠し通せはしないのは明らかである。今日から学校を休まざるを得ないか。

俺はまだ朝6時と言う早い時間から、あの五人に

「もうこの足は隠せないから休む」

との趣旨のメールを送信。

すると、十分もしない内に全員から返事がかえつて来た。

それだけでも充分驚嘆出来る範囲だったのだが、更に驚くべきは…

⋮。

全員が全員、

「自分も休む」

と伝えて来た事だった。

奏江が言つには、連絡を取つている鈴鳳先輩も、どうやらこれ以上は隠せないと学校を休む様だ。

大体の事情を伝えていた母さんには、足の変化を見せ休みたいと言つただけで、許可を得る事が出来た。

……にしても、歩きにくい。

学校を休む事は滅多に無い俺。

一瞬何をしようかと迷いはしたが、結論はすぐに出る。

……勿論、ゲーム三昧だ。

自室に引っ込み、パソコンの電源スイッチを軽く指先で押した。起動する間、手持ちぶさたな時間を縫つて頭の中を整理する。

まずはゲームだ。

だが、折角有り余る程の時間を得た事だし、何か調べようと思つ。

一番気になるのは、完全に獣人になつてしまつどうなるか。
それから、次に獣化するのはどこか。

……確かにこのゲームが始まったのは、俺達が始める一日前だったらしい。

今俺達はゲームをやり始めて……何日目だ?

最初に影で一日目、

次に耳と尻尾で一日、
それから右腕で三日だろ、

今日は、左足で四日目だ。

詰まり、調べれば一日後に俺達はどうなつてしまつのかが分かるかもしねない。

第二章 揭示板

起動していたパソコンで検索エンジンを開き、直ぐさまキーワードを入力する。

「獸化伝 獣化」つと。

次いでエンターキーを中指で押すと、かしやりと軽快な音を発してて検索結果が素早くディスプレイに表示された。一番最初に飛び込んで来たのは、件の獣化伝ホームページ。次に、獣化伝のWIKI。

そして、どこ掲示板だろうか。

「獣化伝の獣化現象について」と銘打たれたサイトに目が移る。

その文字を目にした途端、どこからともなく湧き上がる好奇心に駆られ、俺はその「URL」をクリックしていた。

灰色の味気無い背景と、妙にマッチする黒いゴシック体の文字。下にスクロールすると、つい最近立ち上げられたと思われる掲示板なのに、書き込み件数が930件……。画面右側のスクロールバーに目をやると、その書き込み件数の多さにも頷けた。

ゲームはひとまず置いておき、この掲示板を調べてみよう。

ゲームやつた翌日、何か鏡見たら自分の作ったキャラと同じ奴
が映った
なんで？

最初の方から見る限り、初めは些細な疑問からだつた様だ。
しかし、日を重ねることにそれは深刻化して行き……遂にはこの掲
示板、誰もが目にする様な掲示板になつてしまつたらしい。つい
最近、今日の朝5時に投稿された書き込みに、まとめがあつた。

やり始め当日から変化のまとめ
俺はオープン初日からの参加者
変化は皆同じ力所からの模様

初日：変化無

一日：自分の影が獣人になる

二日：感覚が鋭くなる、耳、尻尾

三日：右腕

四日：左足

五日 必見！！：顔、身体（右足左腕除く）六日：左腕

分かつてているのはここまでだ

俺は今、顔も身体も半分以上獣人になり、仕事には行けなくなってしまった

このゲームをしたが最後、本来の生活には戻れないだろうな……

そこでこの書き込みは終わっていた。

この書き込みが事実を述べているのだとしたら、俺達は明日、確實に人間では無くなるだろう。

やはりネット社会、その情報伝達能力は侮る事は出来ない。

取り敢えず獣化の課程は知る事が出来た。

しかし、一から全て書き込みに目を通しておいたおかげで、7時を軽く越している。

さつと監もつログインしているだらう。

俺は獣化伝ホームページを素早く開き、ログインした。
昨日の雑談兼レベル上げの成果により、TIGERのレベルは38
に。

まあダンジョンにも遊びに行かずにはたすら敵を狩つていれば、すぐには上がるよな。

昨日は固定PT結成などもあり、色々とワクワクしたものだ。

ついでに、ギルドも作っておいた。名前は、CERBERUS

ご存知、地獄の番犬ケルベロスから名前を拝借したものだ。
意味は、このゲームからプレイヤーの未来を守る為の番犬……らし
い。

因みに名付け親は遙霞。どうやって未来を守るのかは定かでは無い。

第三章 嗅覚

午前中はゲームを満喫したのだが、やはり明日が気になつて仕方が無い。

顔と身体が獣化……。

そうなつた俺を見たら、母さんや友人達はどう反応するのだろうか。いや、こんな詰まらない事なんか考えていても……な。

不意に、腹の虫が鳴つた。

あ、そう言えば朝飯食つて無い。

時刻は正午、俺は安全地帯に行き、皆に「昼飯！」と言残して居間へと向かつた。

母さんを呼び、昼飯としてスペゲティを作つて貰う事に。

俺はミートソース派、母さんはカルボナーラ派である。

何故ミートソースのこの深い味わいを分からぬのかが疑問でならない。

多めの量だったにもかかわらずぺろりと平らげ、俺はまた自室へ引っ込んだ。

ただいま、と一言入力した後、PT狩りに参加する。

目標は取り敢えず、全員のレベルを現在の上限である50にする事だ。

夢中になつてゲームをしていたら、突然母さんに呼ばれた。

「虎獅、お夕飯よ。あんた仕方無く学校休んでるのにゲームばっかりして！」

夕食へと呼ぶ声と共に、俺に對しての文句をぶつくさ言つてゐる様だ。

「仕方無いだろー？こんな姿じや学校に行けねえんだからさー」

返事もそこそここ、いつの間にか随分と経つていた時間を埋める夕食がある事を告げ、俺は再び席を外した。

……嗅覚は鋭くなつてるから……匂いで分かるかな？

好奇心とは、常に俺の心をもてあそぶ。目をつぶると、俺は集中して大氣の匂いを嗅いだ。

とろける様な甘い香りを中空に満たし、それでいて甘い香りを上回るスパイスの利いた、母さん特製、俺の大好物。

……カレーだ。

俺は正体の分かつた夕飯に意氣揚々と胸を踊らせ、自室から飛び出した。

絶対おかわりしてやるんだからな！

「おかわりつ……」

「はいはい、急いで食べないの。母さんの作ったカレーなんだから味わって食べなさい」

家の家族構成は

出稼ぎの父

専業主婦の母

専門校に行つた兄貴が一匹

働きに出た兄貴が一匹

そして、末っ子の俺

基本的に家には俺と母さんしかいないため、実にのんびりとした生活が出来るのだ。

親父が居ない間だから、帰ってきたらPCに張り付いていられる。しかし、親父は数年に一度しか帰つてこない為、少しの寂しさもあるが、ゲームに比べたら……。

何の寂しさもこみ上げてこないのが、本音である。

薄情な息子と思われるかもしれないが、全然構ってくれない親父と、飽きないゲーム……。

どちらを取るかと問われれば、俺は躊躇う事無くゲームを取る。

第三章 白虎

存分に腹を満たし、カレーを食べた事により「機嫌な俺は、そのままゲームを再開。

やはり皆も食事をとつて来たらしく、俺達は眠くなるまでゲームを続行する事にした。

夕食をとつて来た時点で、俺達のレベルは44になつていた。

狩場は虎ノ門。

現在このゲームのレベルキャップ（レベル上限）は、50。つまり、どんな強い奴でも今の所は次のレベルキャップ開放まで待つていい状態だ。

噂では、次の大規模アップデートで新職業と竜族、新マップが実装されるそうだが、定かではない。

俺達は全員が45になつたら、次の狩場である最終マップの虎風谷へ向かう。

実はこのゲーム、獣王街を中心として四方にまだ実装されていない、海、山、森、荒野のマップと街がある。

虎風谷以外にもこここと同様のレベル帯のマップがあるのだが、その方角によつて雰囲気が違つため、俺達は好んでこちらの方角に來ていた。

俺の予想……と言つより、確實にこの虎風谷の次のマップ以降には

海のエリアと街が出来るださつ。

何故なら、このマップには水棲生物、特に海の生物型のモンスターが多くなっていたから。

……大規模アップデートか。
何かが実装されると聞くと、自然と胸が高鳴った。

【P-T】 緋熊：早くヒューテートしないかなあ

【P-T】 AIR：メンテナンスは来週の水曜だよね？あー、長いなあ

和やかな空気が流れる中、会話を交わすと関係無く敵を狩り続ける。

気が付けば、レベル上げも関係無しに自然と手が動いていた事もしばしば。

やはり、人数は多ければ賑やかになり、それだけ気分も上向きになる。

この六人の仲がもっと良くなつて、互いに信じ合える仲間になれる

ば、俺は満足だ。

そつ言えば、鈴鳳先輩の事を奏江に頼んだのだが、未だに良い返事が無い。

話題の無くなつて来た会話に、俺は鈴鳳先輩の話を振つた。

【P.T】 TIGER：ベア、鈴鳳先輩はどうした？やつぱ固定には来てくれないかな

【P.T】 BEAR：あ、先輩はOK言つてくれたんだが、キャラの名前が分からん

……聞いて来いよ馬鹿熊。

苛立つ心を押さえ付け、冷静にチャットを返す。

【P.T】 TRIGER：なんで聞いて来ないんだよ！今からメールしやがれ！！

どうやら俺は、あまりの馬鹿さ加減に、冷静に返事が出来無かつた様だ。

その後なんとか先輩の名前を聞き、俺達は一旦獸王街へと引き返す事に。

待ち合わせは、レオンベルガー像。

街の中心部にある広場のど真ん中に立つ、黒い狼を模した銅像は、初心者がまず目にする物でもある。勇ましく雄叫びをあげんばかりのその像の足下は、プレイヤーにとって最高の待ち合わせ場所だ。

先輩は飾る事が嫌いな様で、

「Riou」と名前を付けているらしい。

どことなくあの先輩らしいかな、俺はと心の内で微笑みつつ、レオンベルガー像に到着し、先輩を探す。

外見は白い虎、職業は魔術師と聞く。

さて、どこでいるものやう。

【P.T】 FAR：あれえ、この人かな？

ファーのその一言がチャット欄に表示された瞬間、俺は心踊る様な期待と共にファーの姿を探した。

その気持ちは皆同じだつたらしい。

ファーの元へと辿り着くと、皆が同じように続々と駆け付けて來たのだ。

そして、ファーが横に立つその獣人は、

白い毛皮に黒い縞、魔術師のローブを着込んだ、まさに探していたその人だった。

【P.T】 BEAR：ああ、絶対先輩だな。おい虎、先輩をP.Tに誘つてくれ

【P.T】 TIGER：はいはい、全くお前は本当に人任せな奴だな

言いつつ、Riouと並んでの白虎をP.Tに誘つため、彼を右クリックした。

俺は向らためらひ事無くP.T勧誘を選択。

見知らぬ奴からの勧誘だったためか、しばし反応が無く……。

辛抱強く待っていると、勧誘に応じるシステム告知がチャット欄に表示された。

【P.T】 BEAR：鈴鳳先輩？「めん、遅くなつてさ

【P.T】 Riou：お前がハセ？あ、皆をよみじゅーにー

ひとしきり社交辞令として挨拶が交わされると、次の瞬間、皆のおしゃべりが始まるのだった。

会話を見て、時折俺も交ざる。

鈴鳳先輩は、上級生だらうとネトゲには関係無い、と言つてタメ口での会話を許してくれた。

穏やかで、それでいて底抜けに明るく。

先輩は、俺達の兄貴分になつた。

これで学校の七人は、揃つた訳だな。

ところで、鈴鳳先輩のステータスを見たが、一瞬ばかり自分の目を疑つた。

先輩はどれだけこのゲームをやつているのだろうか。

既に彼のレベルは50、驚いて装備詳細などを訊ねると、装備は全て付加効果付き、との事。

【P.T】 R.I.O.U・暇だったからね、月曜日からやつ始めたんだ

月曜日……、俺達は全員月曜日からのゲームをしているのだが。

【P.T】 R.I.O.U・大学、レベル低い所受けるから暇で暇で。昨日はもつらになつてたよ、ずっとソロプレイだったけど

なんと言つ根性。

ソロプレイはP.Tを組む人より幾分効率が落ちると聞く。
それでも俺達よりずっと早く、先輩はレベルアップのカウントストップになっていたのか。

……何と言つか、恐るべし。そんな先輩にもレベル上げを手伝つてもうひつた。

本当はダンジョンで暴れ回りたいのだろうが、じばしの我慢と言つ事で。

【P.T】 R.I.O.U…いやー、いつ考えると50までの道のりは長かつたと思つ

【P.T】 BEAR・今俺達はその道のりを歩いてるんだな

そうか。

俺達は誰かが創り、通つた道筋をただ辿つてゐるに過ぎない。
しかし、それ以外の道はどこにも無いんだ。

ただひたすら、それを辿るだけ……。

L VUP ! !

【P-T】 TIGER・上がつた！これで俺も皆と一緒に緒だ！

【P-A】 緋熊…50レベルおめでとー！

【P-A】 FAR…おーー！せつたじやん鹿あー！

皆の協力の甲斐あって、全員がレベル50になる事が出来た。

明日は土曜。学校についての心配もせず、俺達は深夜までゲーム三昧。

レベルカンスト（カウントストップ）記念に、今から俺達は一番強
いダンジョンに行く事にした。

第三章 虎の背断崖

俺も楽しみではあるのだが、一つかり、懸念が。

そう、邪獣王の魂だ。

あれにはボス強化の効果がある。これから行くダンジョンのボスは強化される。

それによつてパーティーが全滅でもしたうどつする?
確実に、俺の責任。ゲームとは言え、やはり仲間には力尽きて欲しく無いのだ。

迷い、悩んだ挙句……俺はその顔をみんなに話した。

【P-T】 TIGER：別に俺はこんなアイテム、捨てても良いんだ

【P-T】 FAR：でもさ、何か勿体無くない？

【P-T】 緋熊：折角レアそうな物拾つたんだからとつきなよ

【P-T】 Katze：うんうん、7人で行けばボスだって倒せます！

確かに、今は六人ではない。先輩も加わった今、俺達は七人。
……行ける所まで、行って見ようか。

目的地は、虎風谷のマップ内にあるダンジョン、虎の背断崖。谷とか断崖とか地形の名前を取ってるみたいだが、実際に断崖で戦えるのかが疑問。

ここレベル帯は、40～50
現在このゲーム内で一番恐るべき場所、と言えば分かってもらえるだろうか。

ここ最下層にいるボスは、それなりに強いらしい。

先輩曰く、50レベルのプレイヤーが最低五人は居ないとパーティ全滅、だそうだ。

そんな奴が更に強化されたらどうなるのだろう。

……いや、今はそんな事考えなくて良い。皆に会わせれば済む話だ。

【P.T】 緋熊：「じゃあ、僕と虎君が壁役、最下層まで敵無視で！」

【P.T】 TRIGGER：「OK、目指せ全員の分の騎乗ペストだからな？」

いつのまにやら俺の呼び名が、虎や虎君になつてゐる事に、今気が付いた。

やっぱり俺は鈍いのかなあ。

第三章 騎乗ペット

【P.T.】 R.I.O.U・JUのボス、絶対一つは騎乗ペット落とすから安心しな（笑）

【P.T.】 BEAR：なんだよ先輩、一人だけライドラに乗りやがつて！

ベアの言つたりとは、現在一番人気の騎乗ペットである。

今から狩るボスがドロップするらしいのだが、何しろ相手方はレベル50。

レベルがカンストした猛者のみが立ち向かえる今の所のラスボスだ。

それくらいの見返りが無いと、ショックで心が折れてしまう。

ライドラは露店でも有り得ない桁の値段が至極当然の様につけられる。そしてそれが当然の様に売れて行く。まあ確かに人気の理由も分かる。

ライドラとは、ライド（乗るの英語）とドラゴンを合せた造語。

恐竜、ティラノの様な姿で前脚は小さく、後脚の一本で前傾姿勢をとつて走行する。

手綱のグラフィックまで細く描かれており、誰もが欲しがる魅惑のペットである。

その顔にはブリキの仮面……防具の様な物が装備されており、それが一層魅力を引き立たせていた。

しかし……ここにダンジョンはどう考えても道が入り組み過ぎだろう。

ライドラを駆る先輩の後を、俺達は必死について行く。

騎乗ペットは、乗れば移動速度がかなり速くなるため、先輩の姿は何度か見失い掛けた程。

【P-T】TRIGER：先輩、ダンジョンはマップ見ながら進んでんの？

【P-T】Riou：あ？いや、道は全部覚えてる。ここに来たのも

10回振りだしな

なんて恐ろしい子。

右へ左へ、左へ右へ。

迷つてしまつた。どうなつたのダンジョンの道のりを、先輩は覚えていたと語つのか。

近寄るアクティブモンスターは無視して、第五層まであるダンジョンを駆け続けた。

時折休憩なども挟みつつ、確実に、少しづつ、目的へと迫つて行く。

皆、今何を思つてゐるのだひつ。何を考えてゐるのだひつ。
進む間、殆ど言葉は交わされず、その空白が俺の心に寂しさと叫び
名の響を落とす。

【P.T】AIR・Iのダンジョン、なつつつがいね・・・

【P.T】BEAR：ああ、なつつつがいな

四層へ到着し、その入り口の安全なエリアでの休息。

回復薬を無駄にしないため、モンスターをスルーして来た。
結果的、それは正解だった。

迫り来る敵を逐一片付けていれば、今頃回復薬は底をついていただろづ。

休息時は階ビーストモードでHPを回復し、頃合かと思った先輩が立ち上がると、俺達は再び行動を開始した。先頭を走る先輩は魔術師のため、防御力がどうにも乏しい。

先輩が複数の敵に囲まれた際は、全員で仕方無く片を付けた。

俺達を導く先輩のキャラは、どんな敵が相手だようと勝利を確信しているかの様に、すんすんとためらい無く進む。

いや、ためらいが無いからこそ、先頭を任せられるんだ。

その行動力や判断力は、先輩だからこそその物だらう。俺達じや、先輩の足下にも及ばないな。

五層へ行く道のは、これまでとは打って変わって変わつて簡略化された。

何故かは分からぬが、マップを見た時にそう感じたのだ。
あまり入り組んでいる訳ではなく、かと言つて一直線でもない微妙な所だが。

先を行く先輩の操作も、時折考えた様に止まる事も無くなつた。

ダンジョンには各層にボスがいるが、ここまでどの層でも遭遇せず
……。
もう少し刺激が欲しい所だ。

しばらく先輩の後をついて行くと、あつと言う間に五層への入り口に辿りついてしまつた。

これで良いのか？

【P-T】 Riou：こつから先、敵も強いから注意な？

【P-T】 TIGER：りょーかい

【P-T BEAR・マジか～めんじくせえ

さて、例のボスに出会ひ事は出来るのだろうか。

そして、そんな奴を無事に討伐することが出来るのか。

俺は一抹の不安を抱えていた。

第三章 もぬけの殻

時刻は午前三時。

良い子ちゃんならとっくに深い眠りについているであらつ、そんな深夜。

俺達は五層の各地域に散らばり、ここ のボスを探していた。

先輩曰く、普通は決まった場所にポップ（出現）するが、ボス自体がその場から移動することにより、探さなければならない時もあるらしい。

そして、今はそんな時。

先輩の通り慣れたボスの定位置は、もぬけの殻だったのだ。

【P-T】 RIOU：あちゃ、いなか。人も見なかつたからどうか行つてるな

【P-T】 TRIGGER：手分けして探す？

【P-T】 AIR：そうだね、何かあつたら逃げるけど（笑

作戦はこうだ。

まずボスを探し出し、今いるボスの定位置までおびき寄せる。見つけたらチャットで見つけた事を簡単に伝え、攻撃を受けないよう連れてくる。

そしたら、一斉攻撃！

しかし、俺の邪魔王の魂があるため、なるべく用心するように、との事だった。

皆バラバラに散り、搜索開始。

俺は南の方を任せられた為、ボスの定位置であるマップ中心部から南下中。

俺は戦士で防御力があるからまだいいものの、魔法系職業の奴らはどうするつもりなんだ……。

出会い頭の一撃で昇天したら元も子もないと言うのに。
まああいつらはあいつらでそれなりに逃げる術を知っているか。

今はボスを探そう。

JJのボスの名前は、

大海の虎 、レベルは50。

たいかいのとら、と読めばいいのだろ？。

やはりこの辺りに海のエリアが実装されそだと思うんだよな。
姿はまだ見た事がないため、その大海の虎に会う事も少し楽しみにしている。

大海……虎……

どんなグラフィックなんだろうか。

その時、チャット欄に新しい発言が追加された。

第二章 大海の虎

【P.T】 F A R・出たあーーーへるふみーーー

……よりによつて魔法職のファーと出くわすだなんて。ファーも運が無いな。

しかしここは作戦通りに、マップ中心部へと向かわなければ。来た道を素早く引き返し、俺は全員の集合場所へとキャラを走らせた。

……一足早く来たのかな。

未だ誰も到着しない空っぽの空間にて、一人ボスを待ち構える。

次々と合流する仲間の内、ボスを連れて来るべきファーだけが来る事は無く。

まさか力尽きた訳じゃないよな?

【P.T】 F A R・死ぬつ!

その一言と共に駆け込んで来た狼を見た瞬間、俺はリアルに安堵の溜め息を吐いた。しかし、その安堵の溜め息は瞬時に撤回せざるを得ない。分かつていてと言えば分かつてはいたのだが。

深い深い海の様な群青色の毛色と、腹側を覆つ白い毛皮に、灰色の幾筋もの縞模様。

かつての敵、悲嘆のグリフォンと同じく、その巨体は画面の半分を占める程大きい物だった。

……これが、大海の虎。

……皆怖じ気付いたのか、逃げ回るファー以外誰も動こうとしない中、白虎の獣人が飛び出して素早く魔法詠唱を開始した。

【P.T】Riou・まずは叩いてHPを削るぞ！

アイスニードル！！

氷をアイスピックで粉碎するかの「」とく、バキバキと音を発して地面から氷の針が召喚される。
先輩のスキルだ。

呆気に取られている間、いつの間にか緋熊達も動き出していた。

そうだ、俺も壁役として皆を守らなきゃいけないんだ。

ハツと気が付き、俺は自身の攻撃、防御強化スキルを発動してから、殴り込みに掛かる。

魔法職に遅れを取るだなんて、皆を捨てているのと同じ……そう思った。

虎の咆哮！！

深蒼の虎は、壁役の緋熊に執着して集中的に攻撃を浴びせている。対する緋熊は、補助魔法スキルなどの効果により大した被害も無い様だ。

第三章 緋熊

攻撃力は中々、
防御力はまあまあ、
攻撃速度はそこそこ。

群青の虎……もとい大海の虎。

こいつは強いとは言つても、やはり人数には勝てない様だ。
しかし、先輩曰く
「いつもより少し強い。ステータスが上がっている。何が起こるか
分からぬ」との事。

だがそんな事にもお構いなしに、大海の虎にはスキルスキルの雨あ
られ。
そのどしゃ降りの様なスキル乱舞をもつてしても、やはりボス。
このボスのＨＰを1目盛り分減らす事すら、俺達には相当難儀な事
だった。
それに比べ、群青虎の一撃を五発程食らえれば、壁役である緋熊のＨ
Ｐはギリギリになつてしまふ。
クリティカルでも発生したら……

ジ・エンドだ。

しかし、それを承知でギリギリまでHPを追い込む事は、緋熊にとつても大切な事。

こいつ程、仲間思いな奴はないだろ？

回復役である、カツツエとファーを思えばこそ。緋熊は、回復と補助で減りやすい聖職者のMPを気にして、極力魔法を避けるようにしていたのだ。

ふとそう気づいた俺は、内心緋熊の事を見直した。

普段はあんなに弾けた奴だが、意外な所で意外な一面を出す。

そんな奴に好かれた昭楽は、とんだ幸せ者だよ。

実際の所、二人が付き合っているのかとかは全く知らないが。

【P.T】 F A R : 先輩、いつもならこいつ何分でいける?

【P.T】 R i o u : んー、30分位かな? 大体ね

【P.T】 B E A R : マジ? じゃあコイツ強化されてるからもつとかよー

う~む……。

こればかりはベアと同感だな。

それより、たった一匹のボスで30分も時間が掛かるのか。

第三章 戦闘開始、23分

大海の虎

現段階に置けるラスボス敵存在の一角。

その他の方角には、

北西に大山の狼

北東に大樹の熊

南東に大陸の竜

いずれも特定ダンジョン最深部のボスである。

このボス達は、倒すと高確率でそれぞれ騎乗ペットをドロップする。

虎	騎竜ライドラ
狼	角狼ライガー
熊	炎獅子レオ
竜	飛竜フライドラ

尚、一番人気はライドラである。
その次にライガー、フライドラ、レオ。

大海の虎は、高威力範囲スキルを使用していく。

が、発動条件が決められているため序盤は比較的安全。

大海の虎のHPが50%を切ると、高威力範囲スキル（物理属性）を使用して来る。

50%を切つたら魔法職は避難した方が身のためである。注意。

有効：毒、麻痺、睡眠

無効：上記以外全て無効化される

戦法としては、最初からバンバン攻撃し、50%を切つたら魔法職は逃げる。

その後HPが25%を切つたら35LVのチビトラを10匹召喚するので、これも警戒する事。

以上の注意を怠らなければ、多分きっと恐りなく狩れるはずだと思いますが、確認は無い。健闘を祈る。

……見るからに適当クオリティのWIKI攻略ページ。

最後の「多分きっと恐らく」は、凄まじい程に適当。アバウト。

しかし、手に入れたかった情報は確実に手に入る事が出来た。

危険性のある事については、

まず先に知つて置いた方が身のためだ。

このスキル発動条件などは皆もう知つているかもしねないが、念の為の確認。

……いや、この情報も頼りにならないかもしねないんだ。

何故なら邪魔王の魂……、あれがある限り、俺達の予想範囲外の事なんていいくらでも起こり得る。

台詞の改変……、使用スキルの改変……。

何故この様なアイテムがあるのか。後々、分かれば良いのだが。ふと画面に目を良く凝らすと、大海の虎のＨＰは、やつと50%を切つた所だった。

次いで時計に目を移す。

……戦闘開始から、23分。

第三章 タイガー・タイダルウェーブ

ぼーっとした所でハツとして我に返ると、魔法職の四人はとうにその場からいなくなっていた。

あ……そうか、50%……！！
相変わらず、上の空でも攻撃だけはしつかりとやっていたのだが。改めて見ると、大海の虎のHPは50%になつてはいる。……が、スキルを放つてきそうな気配は一向に無い。これも邪獣王の魂の効果か？

スキル発動条件も、プログラムを書き換えちまつたつて言つのかよ。

……それから遅々として進まない、HPを三人でちまちまと削る作業。

今魔法職の四人に戻つて来てもらうのも、なんだか怖い。

ここは前衛である俺達三人が、どうにか氣張つて行くしかなかつた。

補助無しでいると、それだけで背後が心配になつて來てしまつ。しかし、それでも今この場で諦める様な発言をする訳にはいかないのだった。

そして今この瞬間に、魔法職の彼らを呼ばずに良かつたと安堵の溜め息をつくのだ。

大海の虎のHPが40%を切った時、それは突然発動した。

大海を統べしは我が力なり！貴様らに屈する訳には……いかぬ！

タイガー・タイダルウェーブ！！

大海の虎のグラフィックが、天を食い破らんとばかりに空を仰ぐ。すると、大海の虎の足下から、虎の形とかろづじて分かる津波が発生した。瞬時に俺達三人を飲み込む、虎型の津波に抵抗する術なぞあるはずも無く

飲み込まれた工フェクトが発生し、俺の黒虎の頭上には、 230
0 の数字。

……ヤバい！

俺は素早くHP回復アイテムを使用する。

俺のHPは2500、もう少しでオダブツになる所だつた……！

うわ、ベアっ！！

俺や緋熊は何とか態勢を立て直したが、ベアは防御力が足りなかつ

たらしい。

力尽きてしまったのだ。

【P.T.—TIGER：へるふ！—】

カタカナに変換する間も惜しき、俺はチャット欄に打ち込んでエンターキーを押していた。

第二章 抵抗

素早く駆け付けて来てくれた彼らは、直ぐさま手を貸してくれた。

聖職者のファーとカッシュは、
回復アイテムを連打する俺と緋熊にヒールを掛ける。
攻撃の手の緩んだ今、それを補おうとスキルを放つ魔術師のアイル、
先輩。

【P.T】Riou・次は35%位を切つたら逃げる

こんな状況下でも、先輩は怯む事無く俺達を導こうとしてくれた。
俺達はそんな期待に応えようと、必死に敵に抗つて、抗つて。

先輩の言葉に皆返事をする事も無く、ひたすら敵を攻撃し続けた。

抵抗するな！濁流に全て流されてしまうが良い、流れに身を任せ
てしまえば苦しむ事など無いのだ！！

挑発的な発言が、何故か生々しい程に現実味を帯びていた。
しかし、同時に、その言葉に苛立ちを覚えていた自分がいた。

「流れには、抗え。世の中の流れに、巻き込まれるな」

昔親父の言つていた一言が、頭をよぎつていたから。

……何昔を思い出してんだる。確かに親父は口癖の様に言つていた。
だから俺は気に食わない事があつたら反抗するガキになった。

……それだけのはずだ。

ふと画面に目を戻すと、いつの間に蘇生魔法をもらつたのか、ベア
が何事も無かつたかの様に戦闘に参加している。

全く。他人に心配を掛ける時は馬鹿みたいに掛けるくせに、いざ非
を咎めようとするとき口うりとしていやがるんだ。

先程発動した タイガー・タイダルウェーブ の影響にもめげず、
俺達は地道に攻撃を重ねて行く。

【P-T】 R·M·O·U·そろそろ逃げるぞ、前衛組はまた壁役頼むな

先輩の一言がチャット欄に追加され、俺は身を固くする。

……次は確か召喚魔法のはず。

召喚される奴らを前衛が引き付けている内に、後衛組……魔法職の彼らを呼ぶ手はずだ。

上手く行けば、何の心配も無いのに。
何故……妙な胸騒ぎがするのだろう。

第三章 虎群奮闘

【P-T】 BEAR：なんとか嫌な予感

【P-T】 緋熊：奇遇だね、実は僕も（笑）

【P-T】 TIGER：お前らもか？

一体何なんだ？

……「」の悪寒の様な物は、本能から感じる物なのか？

と、一瞬思考をゲームから逸らした時

愚かな！邪獣王様の魂がある今、我が力に敵うはずがあるまい！
行け、我が愛しき子らよ！！

虎群奮闘！！！【「ぐんふんとう】

瞬間、大海の虎の周囲に、キャラクター並みの大きさの白い虎が一

斎に出現した。

その数、大体15～20匹はいるだろつと推測出来る。

真つ先に俺達三人へと襲い掛かる、強化チビトラ Lv40 の群れ。

クソ……つーマズい。

強化されたヤツがこんなに多くちゃ 確実に俺達の不利だろうが！！ボカボカと好き放題に殴られては、たまらずに舌打ちをするしかなく。

窮地に陥つて、先程の様に直ぐさま駆け付けて来てくれた魔法職四人が、俺達前衛組の希望の光に見えた。

今HP回復アイテムを連打する俺の中には、焦燥感に溢れている。一度にHPを500しか回復出来ない事や、ボスとチビトラに叩かれている緋熊が死んでしまうかもしれない事なんかが……。

いくら壁役とは言えど、防御力にも限界があるのは仕方無い。

俺達壁役は、今は反撃をするよりも、死なない様に自分を守る事で精一杯だった。

【P-T】Riou・チビトラから狩れ！親玉は後回しだ！誰も死なせるなよ！

【P.T】 緋熊：はい！

【P.T】 AIR：おー！

【P.T】 FAR：頑張るぞ（・・・）

一同が困惑する中、先輩の揺るぎない指示が飛んだ。

一匹のチビトラを魔法職四人が集中的に攻撃し、確実にその数を減らしていく。

そして、徐々に安定感を取り戻した俺や緋熊も、壁役をこなしつつ反撃に躍り出た。

やられてぱっかりだなんて、俺のプライドが許さない。

第三章 反撃

着々と敵の頭数を潰して行く。

その数は、もう俺達よりも少なくなっていた。

【P-T】 RIOU・全部倒したら、補助掛け直して突撃な？

各々、返事を返す。突撃とは、勿論ボスへの反撃だろう。

俺達の目的は、こいつを倒す事だから。それと、騎乗ペットを人数分。

後者は後回しにしようとも、前者は譲る訳にはいかない。

【P-T】 FAR・よっし、全滅させた！

【P-T】 AIR・ボスも頑張ろつ

【P-T】 RIOU・じゃあ、補助を前衛組にかけてやつてくれ！

敵の殲滅完了を告げるファーの短い言葉の後、アイルの励まし、決戦に臨む先輩の指示が、チャット欄を飛び交った。マウスを右手に構え、俺はこのボスが他にも何かスキルやらを使って来ないか、心のどこかで警戒していた。

しかし、HPが30%を切つても何の動きもなかつたため、俺もためらう事無くどんどん攻撃を仕掛けていく。先程まで恐れていた相手を、今度は俺達がボカボカと攻め続けた。

【P-T】Riou・あ、ザコ来た！虎、ザコ処理頼む！

【P-T】TIGER・任せとけッ！

時折入る邪魔なザコ敵は、主に俺が制す。アイルが手伝ってくれる時もあった。

大海の虎のHPは、俺達全員の集中攻撃によりどんどん減ってきている。

……まあ、減つてくれないとこっちが困る訳だが。

緒戦での勢いに、更に一も一も過激さをプラスして、俺達は全力でHPを削る事に専念した。

HPが10%を切れば、何か反応があるかもしない。

そう言えば、前回のグリフオントークの時は残りエアーポケットの時に会話を発したのだろう。

……覚えていないな。

第三章 ノイズ

俺達の地道な努力の甲斐あつて、遂に奴のＨＰが10%程を示した。

その時

がああおおるるー！おのれ……！今こそ、真の力を解放せん
！！

その台詞の後、大海の虎に恐ろしいまでの急激な変化が起きた。

【P.T】 TIGER：何だコイツ！？

【P.T】 RIOU：こんな事、今まで無かつたぞ

【P.T】 FAR：超嫌な予感・・・

大海の虎の、格好良くも若干可愛かつたグラフィックが、突然白目を剥いた。

続いて群青の毛皮が、赤黒い不気味な毛色に変化する。

牙と爪のグラフィックも異様に大きくなり、バグの様に画面がブレ始めた。

俺のデスクトップ両脇に設置されたスピーカーから聞こえるBGMや効果音にも、何やらノイズが混ざり始める。

……なんか色々ヤバイ臭いが。

【P.T】 BEAR：おいおい、バグじゃないか？

【P.T】 緋熊：ノイズ……？

【P.T】 AIR：ちょっと……、ボス更に強くなつてない？

ガ……ツ！
ピー！
ザザ……ツ

ザーッ . . . !

ノイズの合間に挟まれる、テレビの砂嵐の様な、耳障りな音たち。音とともに、画面が時折明滅したり、砂嵐が現れたりするのが、余計恐ろしい。

確かにボスは強くなっていた。

緋熊の被害ダメージが増えたのだ。

……その増加量は、約二倍。

残りＨＰが10%だからと、油断した。

防御力はさほど変わらなかつたため、特攻は相変わらずだが。

回復役に回っている一人は、交互に緋熊のＨＰを回復していた。

……引っ越し無しに。

すぐ尽きるＭＰが、その壮絶さを物語る。

変化は、余りにも唐突だった。

攻撃力は一倍に、防御力の変化は無くとも、攻撃速度が異常な程上昇している。

【P.T】 R.I.O.U・早く始末するぞ、何が起ころるか分からぬ

俺も先輩と同じ気持ちだった。
早く、倒さなければ……。

そうは思えども、中々にしぶといこの虎。
今や緋熊VS大海の虎になりつつある。

比べているのは、耐久力だ。

しかし、緋熊サイドには回復役が一人もいる。それも結構有能な。
最早俺達の勝利は確信したものと、そう思っていたのは、自惚れだ
ったのか。

力尽きる訳にはいかぬ、我には愛すべき子らと、この海原がある
のだから……!!

タイガー・タイダルウェーブVer.2!!!

台詞と共に、画面上を四方八方に飛び散る水飛沫、続いて、先程よりも大きな津波のグラフィック。

ちょ……！Ver.2ってなんだよ！

さつき死にかけたんだぞ……！？

まさかまた使って来るなんて、予想しているはずも無く……。

津波の効果音にまで及ぶ細かなノイズ、次の瞬間、俺達のキャラは大波に飲み込まれたのだった。

第三章 バグ（前書き）

本ページより、本文中の文量が大幅に増量致します。
少々見難いかとは思われますが、何卒ご了承下さい。

第三章 バグ

うわ、俺があんな馬鹿げたアイテムを持っていたばかりに……。
この攻撃によつて全員が死ぬ事なんて、目に見えていた。

俺や緋熊でさえあんなダメージだったんだ。Ver.2ともなれば、
確実に死亡フラグ。

最早避ける事も出来ないだろう。

俺は、今度は虎の形をしていなかつた大波に飲み込まれそつた三頭
身のキャラ達を、無表情に見ていた。

ああ、デスペナルティ食らつたらどうしよう……。
そんな次の事を考えていた。

どうせ今、画面には
力尽きました
と表示されているに違ひない。

……見たくなかった。

俺は身体を椅子に深く預ける。

脱力感を感じた。

しかし見なければ先には進めないため、俺は嫌々ながらもその画面
に目を向けた。

……波に、飲み込まれる。

その様を眺める俺の耳には、スピーカーから漏れる調子の外れたBGMと、ノイズ交じりの効果音しか聞こえなかつた。

直撃した。

きっと、この場に居合わせた七人全員が、瞬間にそう思つただろう。

ノイズが、俺の耳を貫く。

ザ……バツ……ザザザ

辛うじて、それがこの波による効果音だと気づいた。
波が引くと、俺のキャラの頭上に、先程と同じ様にダメージ数が表示される。

@ 9 8 ^ 7 ¥ 6 # \$ 〒 5 4 3 2 % ! ?

一瞬ならぬ、数秒間俺が自分の目を疑つたのは、言つまでも無い。
……こんな馬鹿な数字と記号、有り得るか！？

誰しもがそう思つたであろう。

実際に意味の無い数字と記号の羅列の様に、それが意味をなしているとは到底思えなかつた。

大波の直撃を受けたキャラを改めてみると、ダメージなんて全く食らっていない。

ピンピンしている。

なら、今のは何だったのだろうか。

……バグ？

そうとしか考えられない。

一体全体、何がどうなつてこるのだろう。

……つてそういうじゃない！

早く頭のためにマイツをどこにかしなきやだろ、俺！

【P-H】 R.I.O.U・みんなノーダメだよな？さつさと倒そつ、マジでヤバイ・・・

【P-H】 TIGER・倒したら元に戻るかな？

勝手な解釈を織り交ぜつつ、俺達は必死に手を動かした。

大海の虎の残りHPは、10%以下。もう俺達の勝利である事は確定したものだわ。

先程の様にバグダメージ数が表示されれば、痛くも痒くもない。

俺達はひたすら攻撃を続けた。

今や目的も何もかも忘れて、ただただ殴っていた。

もうドロップ品なんて、関係なく。俺は必死に願っていた、コイツが早く倒れればいいのに。

不意に、敵の断末魔がノイズと共にスピーカーを通して俺の聴覚を刺激する。

トラ耳へと届けられた不協和音は、長らく俺の耳に余韻を残したのだつた。

……やつと、終わつたんだ。

この一時くらい、安堵の溜息を吐いてもいいだらう。

大海の虎が消滅した今、俺が脅かされることはないのだから。

画面に目を移すと、複数のボスドロップ装備。

中には、ライドラと思われるものも落ちている。数を数えると、ラ

イドラは六つ落ちていた。

全員分が一度にして揃つたのは、運が良かつたのだろうか？それとも、バグの影響……？

しかし、それを気にしていたらアイテムが消えてしまつため、各自でライドラを回収した。

ドロップアイテムは俺が拾い、分配する。俺は自分の利益だけがあればそれで良い。

ふと気がついた時には、BGMに混じるノイズや、画面の砂嵐など

は消えていた。

きっと、運営に問い合わせても原因などは答えてくれないだろ。未だにノイズが耳に残り、俺はむしゃくしゃしてBGMを流し続けるスピーカーの電源を乱暴に切った。

静かな部屋の中、俺の息遣いだけが耳に残る。

【P.T】FAR：いやいや、なんか怖かつたね、お疲れ様！

【P.T】BEAR：こ、これ絶対何かおかしいよな？

【P.T】Katzne：お疲れ様です。一体何だつたんでしょう？

緊張の糸がふつりと切れて、俺は椅子の背に左腕を掛けながら、疲れた瞳をしきりにこする。

俺以外の仲間達が今起こった謎の出来事について語り合っている。しかし、俺にはもうそんな気力は残っていなかつた。

激しい疲労感を感じた。

ふと画面に田を戻す。俺の反応が無い事が気になつたのだろう。

【P-T】AIR：虎？だいじょぶ？

【P-T】TIGER：ああ、疲れただけだよ。あんなの初めてだし、
気が張つてた

それに同意する声が上がり、俺達の楽しい冒険劇は、今日のところ
はお開きに。

獣化伝をログアウトする時、俺の脳裏にはあのアイテムが原因だと
言つ事しか頭に無かつた。

明くる、土曜日。

俺の身体全体は黒い毛皮に覆われている。しかし、獣化した腕や脚をここ数日に渡り見ていたため、最早見慣れてしまった。

無事に人間らしいと思えるのは、左腕と右脚だけ。だいぶ、変わつて来ている。

明日、明後日になれば、完全に獣人化してしまつと言つ事も頭の片隅に置いてある。

俺は獣化を気にせず、邪獣王の魂と言つアイテムについて、調べていた。

レベルはカウントストップだ、レベルを上げる必要は無い。仲間にはしばらく席を外す旨を伝えてあつた。

……とは言つたものの、これと言つた成果なんて一つも無いのが現状だつたり。

いくら検索を掛けてもほとんど引っ掛からないし、詳細なんかが分かるはずもなかつた。

しかし、邪獣王の魂を拾つた者とのあるブログに興味深い……いや、昨夜の俺達と同じ様な症状がつづられていた。

バグ、ノイズ、エフェクトの変化、グラフィックの異常……。

やはり、あのアイテムはバグを引き起こす起因なのか。

その後は特に良さげな情報を手に入れる事は出来なかつたため、俺は再びあの掲示板を検索した。

獣化伝の獣化現象について

そのタイトルの掲示板を見つけ、クリックした。

この間掲示板を覗いた時は、書き込み件数が900件を軽く超えていたはずだ。

しかし、この掲示板の書き込み件数は、324件となつていて。書き込み件数が1000件を超えたために新しくしたらしい。その旨が一番最初の書き込みに記されていた。

……お、一番最初の書き込みには更に、初めてこの掲示板を見たプレイヤーへ向けて、まとめが綺麗に書いてあつた。

獣化現象について、ゲーム開始から身体の各部位の変化。しかし、最後には五日目以降人目を避ける様にとの警告もあり、事態の深刻さを文体によって表現してあつた。まとめに軽く目を通す。

七日目・右脚

新しい部位変化が載っていた。

七日目で全身が獣人になるのなら、八日目は一体何が逸る気持ちを無理矢理押さえ付け、俺は深く息を吸つた。

明日になれば、分かるだろう。

三日後には、自分だって同じ運命を辿るに違いない、待つていれば現象の方から俺を迎えてくれるさ。

俺は書き込みを一つ一つ調べて、時刻が正午を回って食事をとつてからやっと獣化伝へとログインした。

【P.T】 TIGER・ちゃんお

【P.T】 AIR・あ、虎来たー

【P-T】 緋熊・遅かつたじやん！

挨拶もそこそこ、「俺はギルド員専用のメインページを開いた。俺を除く他の仲間達が、今どこにいるのかを調べたかったからだ。

ギルド員一覧を見ると、全員街にいるらしい。

……一体何をしてる？ 今日はイベントも無かったはず。

しかし、俺のキャラは未だに昨夜と同じくダンジョンの最深部の安全なエリアにいる。

身動きは、取れない。

さて、どうしたものか？

俺が思うに、ここは一度力尽きて街に強制送還されるのが得策かと。昨日手に入れたライドリを駆つても、道中のマップ数が多く、着くのは相当遅くなる。

デスペナルティーは、現在の経験値の3%が引かれるだけ……と考えると、後者の方が手っ取り早い。

俺は早速奥義「死に戻り」をするべく安全地帯から飛び出した。その際、防御力をカバーする鎧を取り外し、周囲のザコ敵を殴つて

かき集める。

防具は意外と防御力上昇が高く、取り外した状態だと見る見る内にHPが削られていった。

少し自分のキャラに罪悪感が残るが、時間差を考えると、どうでも。

力尽きる寸前に、再び鎧を付け直し、俺のキャラは遂に昇天してしまった。

画面中央を陣取る、

「復活地点に戻りますか?」

の文字とウインドウ。

その文字の下には、0・59・59とカウントダウンを告げる数字が。

どうやら、この数の時間内に応答が無ければ強制送還らしい。

俺は今すぐに帰りたかったため、迷わず「はい」と書かれたところをクリックした。

一瞬画面が暗くなり、俺のキャラは次の瞬間には街に着いていた。

きつちりと経験値3%が引かれ、HPが1%になっている所を見ると悲しくなったが。

よし、取り敢えず聞いてみよう。

【P-T】 TIGER・みんなどーいんの?

【P-T】 BEAR・露店

【P-T】 緋熊・露店いるよ～

【P-A】 R-I-O-U・露店の物色だ。お前も来いよ！

なるほど、露店か。

そう言えど、あれから回復アイテムも無くなつて来てたな。

丁度良いか、俺も行こう。

俺は獣王街の北部にある露店エリアへ向けてライドラを走らせた。

獣王街は、中心部にレオンベルガー像、北部に露店街と戦士ギルド、南部に魔術師ギルド、東部に聖職者ギルド、そして西部に盗賊ギルドが点在する。

転職の際は、それぞれのギルドへ転職クエストを受けに走つて、無事にクエストを完了し、報告出来れば終了になる。

そう言えど、俺の時は皆に手伝つてもらつてたな……何故だか今じやもつだいぶ前の様に思えるのだが。

第三章 宝探し

露店街へ近付くにつれて、パソコンの処理速度が落ちて来る。

それだけ人口密度が高いのだ。見渡す限りに、露店の看板、看板、看板。

露店とは、人によつてはバザーなどと名を変える。

しかし、機能などはどこのがゲームも代わり映えはしない。

昼間は露店で店を出して放置、夜は本格的に活動するつて人が多いのだろう。

賢く軍資金を稼ぐには、最も手っ取り早い方法だとも言える。ただ、それが売れればの話だが。

その露店を漁る人……今現在活動中の方方が圧倒的に少ないのは、今が昼時だからかもしれない。

俺達は、その圧倒的に少ない部類に入る。

【P.T.】 TIGER：来たぞー、何か探し物か？

【P.T.】 R.I.O.U.：ああ、一番安い回復薬を探してゐるんだ。希望は単価15Gくらいだな

【P.T.】 緋熊：ちなみにLV45以上の回復薬！

ふむ……。そうとなれば俺も必要だな。

まあ今はレベル上げは出来ないし、のんびり探し物も良いかも知れない。

希望単価が15Gで、LV45以上の回復薬だなんていつも見つかる訳がない。

何故なら、その条件に見合ひの平均価格はせいぜい20Gだからだ。

それをこんな露店の中から探すのは、なんとかの山から針を見つけるのと一緒に思つ。

しかし、今は何となく暇だ。

付き合つてやつても良い、俺も少し安い回復薬を探さないとな。

【P-T】BEAR：先輩、見つかんかったらどうする？

【P-T】TIGER：つーかいくつ必要なんだ？

【P-T】RIOU：いつぺんに喋るなー見つからなかつたら20Gのを買づ、必要数は限らない！

時折そんな会話を交わし、俺達は全員で回復薬を探すことになった。まあ、どうせ皆も探したい物はあつただろう、これはほんのついでだ。

当の俺はと言ひと、実は探している物があった。

それは何か。すばり付加効果つきでLV50、戦士用防具一式だ。防具はそれぞれシリーズと呼ばれる物があり、それを一式揃えると、様々な恩恵が得られる。

例えば、戦士用初期防具のレザーシリーズ。

これは一式揃えると、HP+80、攻撃力+10……と、まあ初期にしては良い効果が発動する。

シリーズによつてそのオマケは変わつて来るため、事前にWIKIなどが必要なシリーズを調べると良い。

しかし、そのシリーズも同じく帯で三種類もあるため、探す方が困難だつたり、見つからなかつたりする事もしばしば……。

ボスドロップア装備、生産装備、店売り（モンスター・ドロップ）の普通装備と、集める方の身にもなつて欲しい。

ちなみに俺の探しているのはボスドロップのレア装備、猛破【もう】は【シリーズ】だ。

その内また違うなんとか装備が出るんだろうな。ギルド装備シリーズとか。

頭の中を切り替えて、俺は宝（回復薬と装備）探しに没頭する事にした。

端から端まで一つ一つを覗いて行く。

……が、目的の物は一向に見つかりはしなかった。
必要な時に見つからず、不要な時にぼろぼろと……。全く、世の中
呆れるほどに不親切である。

念のため皆にも、猛破シリーズを見かけたら声を掛けてくれる様に
言つてある。

それでも、何の声もないのがまた寂しくなつてくるのだ。

と、その時一般チャットによる会話がログに飛び込んできた。
一般チャットは、近くのプレイヤーと会話する時に多用される。
特徴としては、会話の内容が他人にも見える事など、時には周囲の
プレイヤーを巻き込んだ大規模な会話に発展することもある。

その一般チャットで会話されていたのは、今話題の獣化についてだ
った。

【一般】 KEH・Jん、えじさん今日向日だつけ?

【一般】 えじふと・Jんー俺は今日で4日目、左足まで來たよ

【一般】 KEH・つわ、來てるね……僕はまだ2日目だ~

他愛ない会話ではある。

だが、周囲にいたプレイヤーは皆この会話に注目している事だらう。何故なら、自分が獣化している訳ではないとの、安心感を得たから。

かく言つ俺も、その一人。

【一般】 ケン・セイシネバサ、全身まで獣化したらいつなるのかな？

【一般】 えじっぷと…まあ、どうだらうな。やっぱ自我無くなるとか、そういうオチじゃない？

そこまでは俺も想定している事だ。他に何があると言つんだらう。そこで、一般チャットを交わしていた彼らの間に乱入者が現れた。

つてくれる？ログ流れるんだけど

【一般】 えじっぷと…なら一般チャットが見えなによつてFF機能

使いぱいこじやないつすか？

OFF機能とは、特定のチャットログを非表示に出来る、つるとい奴がいる時などに活躍する機能だ。

ログが流れるとは、チャットログと呼ばれる発言の履歴が、一定の発言を超えると消えてしまう事である。有益な情報がログ上にある場合、別のチャット機能で会話をしている場合、ログが流れてしまうのは好ましくない。

この時は、影狼……かげろいへさんの方が有利だろ？
何が有利か？正当性だ。

こう言った小競り合いは、至る所で展開される。
どちらか一方が立ち退く、もしくは折れなければ、際限なく続く。

【一般】影狼・多分この辺りにいる人も一般はつるすこと思つてゐるよ
【一般】KEI・済みません・・・内緒でお話します

【一般】えじふと・けい良じよ、向こう行こうぜ

それを期に、一人の会話が表示されることは無かつた。どこかへ行つたのだろう。

影狼さんは、どこへ行つたか知れたもんじやない。

影狼さんの様に、他人の非をつく人は、このネット社会でも少ないうのが事実だ。

それは、行動後に何をされるか分かつたもんじやないと言つ、恐怖から。

もしくは、ただ面倒くさい、関係無いからと言つ考えからの場合が多い。

俺は……ただ一人の意見を聞きたかつただけかな。

そうでなければ俺も影狼さんのように注意していたはずだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2010i/>

オンラインRPG【獣化伝】

2010年10月9日00時05分発行